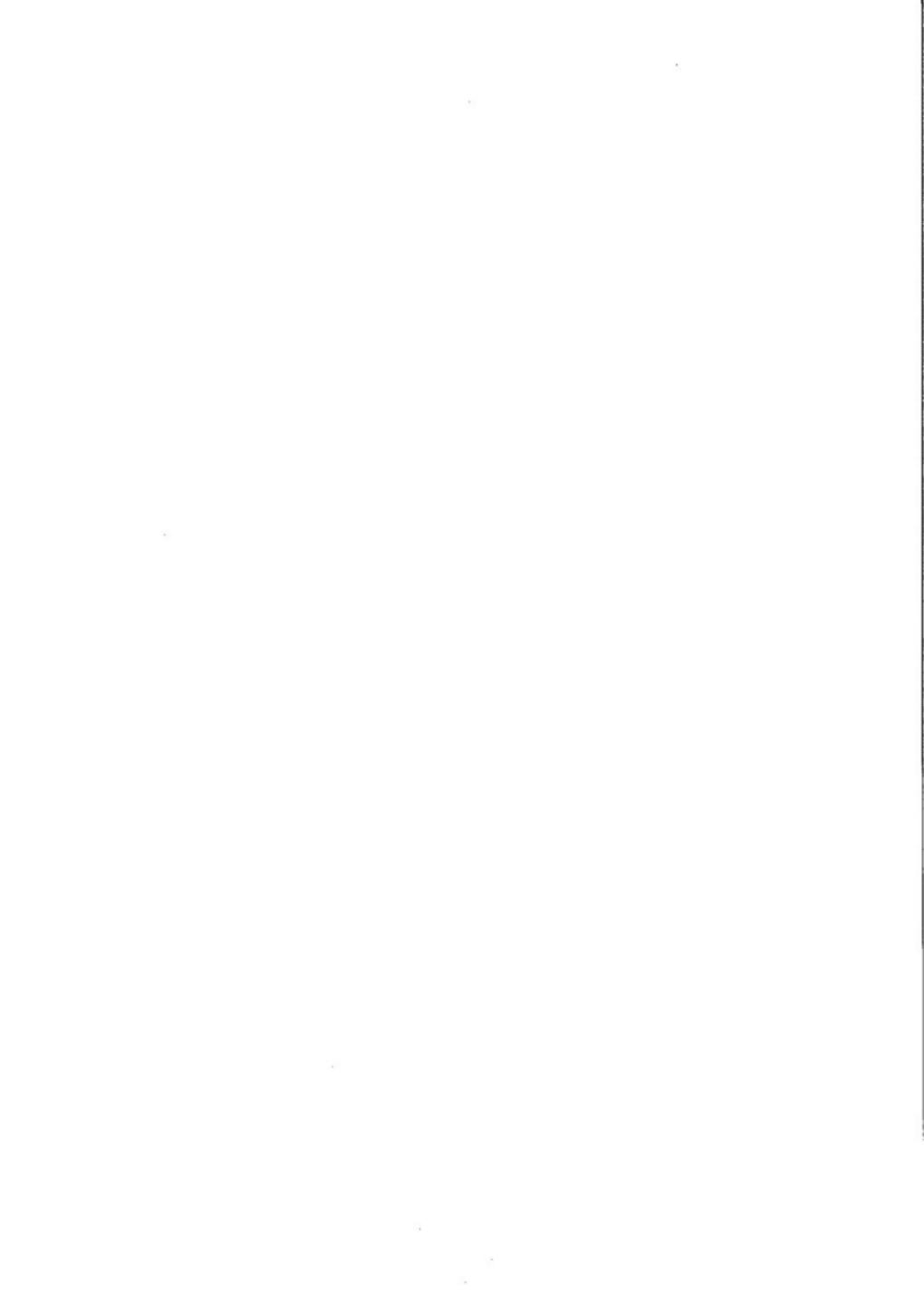


萱 振 遺 跡

第26次・第27次調査

2011

財団法人 八尾市文化財調査研究会



萱振遺跡

第26次・第27次調査



2011年

財團法人八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は大阪府の東部に位置し、旧大和川が形成した河内平野の中心部にあたります。八尾市は古くから人々の生活の場として栄えていた地域であり、現在でもそれらの先人が残した貴重な文化遺産が数多く存在しております。

近年、都市開発が進み各種土木工事等が増加するなか、これらの文化財を破壊から守ること、また記録保存し後世に伝承することが我々の責務であると認識する次第であります。

本書は、近年多発している短時間の局地的な集中豪雨による浸水被害に対しての自衛策として、平成22年度に市立八尾中学校のグラウンドで実施した流域貯留浸透施設築造工事に伴う発掘調査の成果を収録したものであります。

豈振遺跡第26次・第27次調査では古墳時代前期～中世の遺構・遺物が数多く検出されており、当該期の実態を知るうえで貴重な資料を提供する結果となりました。

本書が地域の歴史を解明していく資料として、また埋蔵文化財の保護・普及のため広く活用されることを願っています。

最後になりましたが、一連の発掘調査に対して多大な御支援、御協力をいただきました関係諸機関の皆様に深謝すると共に、発掘調査や整理作業に専念された多くの方々に心から厚く御礼申し上げます。

平成23年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会
理事長 西浦昭夫

例　　言

- 本書は、大阪府八尾市緑ヶ丘一丁目地内で実施した流域貯留浸透施設整造工事(市立八尾中学校)に伴う発掘調査報告書である。
- 本書で報告する菅振遺跡第26次調査(KF 2010-26)、第27次調査(KF 2010-27)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1. 各調査の概要は以下に示した。

	第26次調査(KF 2010-26)	第27次調査(KF 2010-27)
指示書番号	八教文文第104号 平成22年5月21日	八教文文第163号 平成22年6月14日
調査地	八尾市緑ヶ丘一丁目地内	八尾市緑ヶ丘一丁目地内
調査原因	八尾中学校流域貯留浸透施設整造工事(市立八尾中学校)	八尾中学校流域貯留浸透施設整造工事(市立八尾中学校)
調査期間	平成22年5月22日	平成22年7月16日～8月14日
調査日数	1日	33日
調査面積	約36m ²	約960m ²
担当者	高萩千秋・原田昌則	高萩千秋・原田昌則・坪田真一

- 現地調査においては、第26次調査—飯塚直世・市森千恵子・梶本潤二・田島宣子・芝崎和美、第27次調査—飯塚・伊藤静江・市森・梶本・北原清子・芝崎・田島・竹田賀子・永井律子・村井俊子・村田知子が参加した。
- 整理業務は、調査終了後隨時行い、平成23年3月末に完了した。
- 木書作成に関わる業務は、遺物実測—伊藤・北原・山内千恵子・図面トレース--・山内・岡面レイアウト原出・山内、遺物撮影—北原、写真図版作成—北原・尾崎良史が行った。
- 本書の執筆は高萩・原田、全体の編集は原田が行った。

本　　文　　目　　次

はしがき

序

例言

第1章 はじめに	1
第2章 第26次調査	4
第1節 調査の方法と経過	4
第2節 各調査区の層序	5
第3節 検出遺構と出土遺物	7
第3章 第27次調査	10
第1節 調査の方法と経過	10
第2節 基本層序	13
第3節 検出遺構と山上遺物	14
1) 発掘調査の検出遺構	14
2) 遺構に伴わない遺物	36
3) 立会調査	38
第4章 まとめ	39

挿 図 目 次

第1図 調査地周辺図	2
第2図 第26次調査 調査区設定図	4
第3図 1、4、6、7区検出遺構平面図	7
第4図 1区～4区断面図	8
第5図 5区～9区断面図	9
第6図 第26・27次調査 調査区設定図	10
第7図 平断面図	11-12
第8図 調査区地区割り図	13
第9図 S B 1、S B 2 平断面図	15
第10図 S B 3～S B 6 平断面図	16
第11図 S B 7、S B 8 平断面図	17
第12図 S E 1 平断面図	18
第13図 S E 1 出上遺物実測図	19
第14図 S K 2、S K 6 出土遺物実測図	20
第15図 S K 1～S K 4 平断面図	21
第16図 S K 5～S K 7 平断面図	22
第17図 S K 7 山土遺物実測図	23
第18図 S K 8、S K 9 平断面図	24
第19図 S K 10～S K 14 平断面図	25
第20図 S K 15 平断面図	26
第21図 S K 9、S K 10、S K 11、S K 15 出土遺物実測図	26
第22図 S D 4、S D 6、S D 7、S D 9、S D 10 断面図	27
第23図 S D 4、S D 6 出上遺物実測図	27
第24図 S D 7 山土遺物実測図 1	28
第25図 S D 7 出土遺物実測図 2	29
第26図 S D 9 出土遺物実測図	29
第27図 小穴・柱穴出土遺物実測図	36
第28図 第3・4層出土遺物実測図	37

写 真 目 次

写真1 第27次調査調査風景 1

表 目 次

第1表 周辺の発掘調査一覧表	3
第2表 小穴・柱穴法量表	31~36

図 版 目 次

図版 一 調査地北部全景	
同 上	
図版 二 調査地南部全景	
同 上	
図版 三 SB 1 検出状況	
SB 2・3 検出状況	
SB 4 検出状況	
図版 四 SB 5 検出状況	
SB 6 検出状況	
SB 7・8 検出状況	
図版 五 SE 1 検出状況	
SK 7 検出状況	
SK 9 検出状況	
図版 六 SK 11 検出状況	
SD 6・7 検出状況	
SD 9 検出状況	
図版 七 SE 1、SK 7、SK 9 出土遺物	
図版 八 SK 9、SK 10、SK 11、SD 4、 SD 6、SD 7 出土遺物	
図版 九 SD 7、SD 9、SP 167、SP 210、 SP 301 出土遺物	
図版一〇 SP 232、SP 211、第3層、第4層 出土遺物	
図版一一 第4層出土遺物	

第1章 はじめに

萱振遺跡は、大阪府八尾市の北西部に位置する緑ヶ丘一～五丁目、萱振町一～七丁目、北本町三・四丁目、楠根町一丁目に所在する弥生時代中期～鎌倉時代に至る複合遺跡で、東西0.5～0.9km、南北1.1kmがその範囲とされている。地理的には、旧大和川の主流であった長瀬川とその支流である玉串川に挟まれて南北方向にデルタ状に展開する低位冲積地に位置している。

萱振遺跡が遺跡として認識されたのは、遺跡範囲の南東部にあたる緑ヶ丘一・二・五丁目に存在した八尾競馬場〔昭和5(1925)年～昭和15(1940)年〕跡地内で昭和18(1943)年に防空壕を構築する際に、古墳時代中期の土師器片や子持勾玉が出土したことを嚆矢とするが、出土地点や出土層位等の詳細は不明であった。昭和57(1982)年以降には、八尾競馬場跡地一帯に建てられていた府営・市営住宅の建替えや八尾市の公共施設建設に伴う発掘調査が大阪府教育委員会(以下、府教委という)、(財)八尾市文化財調査研究会(以下、当調査研究会といふ)により実施されてきた。これら一連の調査の結果、遺跡範囲の南部では弥生時代中期から鎌倉時代に至る複合遺跡が存在していたことが明らかとなつた。遺跡範囲南部における主な調査成果としては、昭和57(1982)年度の府教委による緑ヶ丘二丁目の府営住宅に伴う発掘調査で、古墳時代前期前半(布留式期前半)を中心とする居住域が検出された他、後に中河内地域での布留式土器古段階の基準資料に位置付けられた土器群が出土している。その他、当調査研究会が昭和60(1985)～61(1986)年度に行った府営住宅に伴う萱振遺跡第3次調査では、方墳で主体部に木棺が直葬された古墳時代後期後半の「萱振2号墳」が検出されている。当該期においては、生駒山地西麓部を中心に展開した高安古墳群に代表されるように、円墳で主体部に横穴式石室を持つ古墳が通有な趨勢において、平野部で検出された「萱振2号墳」の存在は、6世紀代における古墳造営基準の在り方を考える上で一石を投じる結果となつた。一方、遺跡範囲北部では、昭和58(1983)～59(1984)年に府教委による府立八尾北高校建設工事に伴う発掘調査が実施されており、弥生時代後期から室町時代に至る遺構・遺物が検出されている。なかでも、古墳時代前期後半の「萱振1号墳」からは、鋸付円筒埴輪・朝顔形埴輪の他、韌形埴輪をはじめとする豊富な形象埴輪が多量に出土しており、古墳時代前期の地域首長の動向を知るうえで新たな知見を提供している。

今回、発掘調査を実施した八尾中学校の校内では、昭和60(1985)年度に当調査研究会が体育馆等建設工事に伴って実施した第2次調査(KF85-2)を実施している。4箇所(第1～4調査区)の調査区を設定して発掘調査を実施した結果、第2～第4調査区において古墳時代前期後半(布留式期後半)から鎌倉時代後期(13世紀後半)に比定される遺構が検出されている。なお今回実施した第27次調査の調査位置が第2次調査(KF85-2)の第4調査区の南西側に隣接している。



写真1 第27次調査調査風景(南から)



第1図 調査地周辺図 ($S=1/6000$)

第1表 周辺の発掘調査一覧表(小規模な調査を除く)

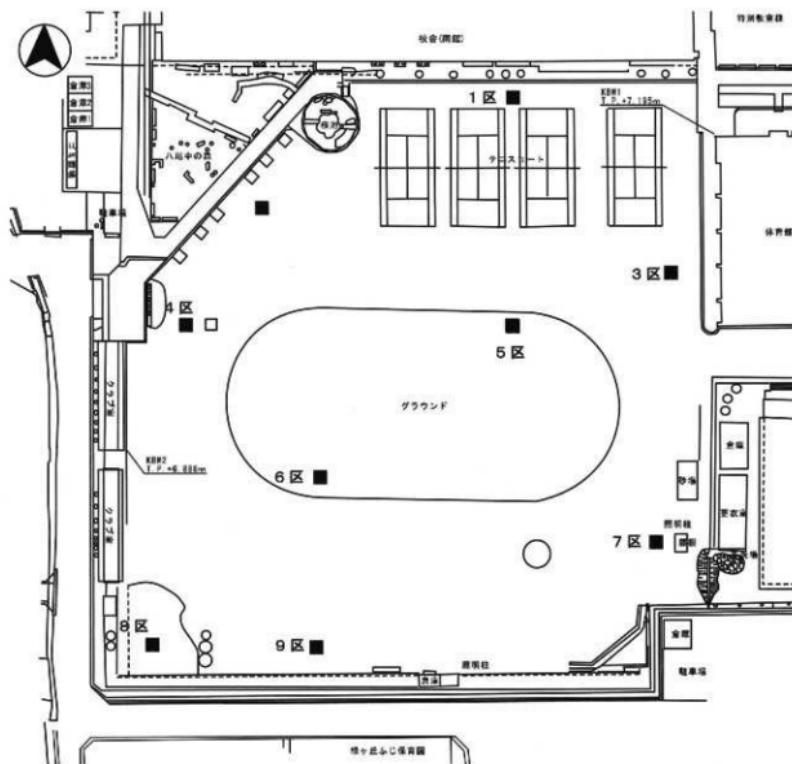
番号	調査名(略号)	調査主体	所在地	調査期間	文献
1	萱振	府教委	萱振町七丁目	S58/6/17～S62/7/18	庄原義也1992「萱振遺跡」『大阪府文化財調査報告書第39號』大阪府教育委員会
2	萱振(KF91-11)	八文研	萱振町四丁目	H3/8/26～9/25	高木千秋1992「萱振遺跡(第1次調査)」『八尾市埋蔵文化財定期調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告44 (第2回)
3	萱振(90-006)	市教委	萱振七丁目	H4/4/6～4/9	高木千秋1993「萱振遺跡(90-006)」調査、『八尾市内遺跡平成4年度発掘調査報告書I』八尾市文化財調査報告27 八尾市教育委員会
4	萱振	府教委	緑ヶ丘二丁目	S57/6/28～8/10	大野一雄1983「萱振遺跡発掘調査報告」・『八尾市緑ヶ丘2丁目所在』大阪府教育委員会
5	萱振	#	緑ヶ丘二丁目	S58/12/～S59/3/31	坂田重功1984「萱振遺跡奈良時代製鉄工事」『八尾市緑ヶ丘2丁目所在』大阪府教育委員会
6	萱振(KF85-2)	八文研	緑ヶ丘二丁目	S60/5/24～7/27	西村公助1990「市文八尾中学校体育館建設工事に伴う調査(第2次調査)」『萱振遺跡発掘調査報告書』(財)八尾市文化財調査研究会報告20 (財)八尾市文化財調査研究会
7	萱振(KF85-3)	#	緑ヶ丘二丁目	S60/11/7～S61/4/30	西村公助1990「荷造八尾塗装第3刷作業新設工事に伴う調査(第3次調査)」『萱振遺跡発掘調査報告書』(財)八尾市文化財調査研究会報告20 (財)八尾市文化財調査研究会
8	世振(KF86-4)	#	緑ヶ丘二丁目	S61/7/25～10/31	西村公助1993「V・世振遺跡(第4次調査)」『八尾市埋蔵文化財定期調査報告書』(財)八尾市文化財調査研究会報告37 (財)八尾市文化財調査研究会
9	萱振(KF87-5)	#	緑ヶ丘二丁目	S62/12/3～S63/3/1	西村公助1993「V・萱振遺跡(第5次調査)」『八尾市埋蔵文化財定期調査報告書』(財)八尾市文化財調査研究会報告37 (財)八尾市文化財調査研究会
10	萱振	府教委	緑ヶ丘四丁目	S62～63年度	—
11	東郷	#	桜ヶ丘・旭ヶ丘	S62/5/26～S63/11/1	高木千秋1989「東郷遺跡発掘調査」・『八尾市桜ヶ丘・旭ヶ丘所在』大阪府教育委員会
12	受振(KF89-8)	八文研	緑ヶ丘一丁目	H11/7/17～9/30	西村公助1993「V・受振遺跡(第8次調査)」『八尾市埋蔵文化財定期調査報告書』(財)八尾市文化財調査研究会報告37 (財)八尾市文化財調査研究会
13	萱振(KF92-12)	#	緑ヶ丘五丁目	H4/2/10～6/10	原田敏則2008「V・萱振遺跡(第12次調査)」『萱振遺跡』(財)八尾市文化財調査研究会報告109 (財)八尾市文化財調査研究会報告109 (財)八尾市文化財調査研究会
14	萱振(KF93-14)	#	緑ヶ丘五丁目	H5/8/9～H6/3/14	原田敏則2008「V・萱振遺跡(第14次調査)」『萱振遺跡』(財)八尾市文化財調査研究会報告109 (財)八尾市文化財調査研究会報告109 (財)八尾市文化財調査研究会
15	萱振(KF94-15)	#	幸町二・三・四丁目	H6/4/18～4/27	岡田慎一1996「V・萱振遺跡(第15次調査)」『萱振遺跡』(財)八尾市文化財調査研究会
16	東郷(86-419)	市教委	桜ヶ丘三丁目	S62/8/7～8/19	米田敏也1988.3「T・東郷遺跡(86-419)の調査」『八尾市内遺跡平成2年発掘調査報告書I』八尾市文化財調査研究会報告17 八尾市教育委員会
17	東郷(TG93-45)	八文研	桜ヶ丘三丁目	H16/3/16～4/1	岡田慎一1995「T・東郷遺跡(第45次調査)」『東郷遺跡』(財)八尾市文化財調査研究会報告49 (財)八尾市文化財調査研究会
18	東郷(94-369)	#	桜ヶ丘一～三丁目	H16/9/22～28、10/3	米田敏也1995「3・東郷遺跡(94-369)の調査」『八尾市内遺跡平成2年発掘調査報告書II』八尾市文化財調査報告22 平成6年度公共事業 八尾市教育委員会
19	東郷(TG2003-60)	八文研	桜ヶ丘二・三丁目	H15/5/6～6/11	橋口 宏2010「東郷遺跡第60次調査」『東郷遺跡』財团法人八尾市文化財調査研究会報告130
20	東郷(TG2005-64)	#	光町二・三丁目	H17/4/4～10/4	理田一他2006「22・東郷遺跡第64次調査(TG2005-64)」『平成17年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
21	萱振(KF2010-26)	#	緑ヶ丘一丁目	H22/5/22	本書掲載
22	萱振(KF2010-27)	#	緑ヶ丘一丁目	H22/7/～8/14	本書掲載

凡例 大阪府教育委員会=府教委、八尾市教育委員会=市教委、(財)八尾市文化財調査研究会=八文研

第2章 第26次調査

第1節 調査の方法と経過

今回の発掘調査では、八尾中学校グラウンド内で計画された流域貯留浸透施設築造工事による掘削深度内での遺構・遺物の存在確認を目的とした。グラウンドの全域にわたり $2 \times 2\text{ m}$ 規模の調査区を9箇所(1～9区)設定した。調査で使用した標高基準は、グラウンド東(KBM1=T.P. + 7.195m)とグラウンド西(KBM2=T.P. + 6.886m)を使用した。現地表面の標高は7m前後を測り、南東側がやや高い。また、各調査区の層名については、調査区が離れている関係もあり、敢えて統一せず、それぞれの調査区の層序を記した。層名の表記においては、調査区番号の後に層名を付した(凡例第1区1層→101層)。



第2図 第26次調査 調査区設定図 (S=1/1000)

第2節 各調査区の層序

1区

- 101層：盛土。層厚0.2m前後。水平堆積。
- 102層：N6/0灰色砂質シルト。層厚0.05～0.1m。
- 103層：10YR1/2灰黄褐色細礫混砂質シルト。層厚0.15～0.25m。不均質な層相である。
- 104層：10YR5/3にぶい黄褐色細礫混砂質シルト。層厚0.10～0.2m。不均質な層相である。
- 105層：N5/0灰色砂質シルト。層厚0.1m前後。酸化鉄が斑点状に認められる。中世の水田作土と考えられる。
- 106層：N6/0灰色砂質シルト。層厚0.2m前後。酸化鉄が斑点状に認められる。105層と同様、中世の水田作土と考えられる。
- 107層：5Y7/2灰白色砂質シルト。層厚0.05m前後。酸化鉄が斑点状に認められる。106層の水田の床上と考えられる。
- 108層：10YR6/2灰黄褐色細粒砂。層厚0.1m以上。河川の堆積土である。
- 109層：N7/0灰白色細粒砂。層厚0.1m。遺構の埋土である。時期は古墳時代後期(6C代)と考えられる。
- 110層：N4/0灰色細粒砂。層厚0.1m。炭状の斑点が見られる。遺構の埋土と考えられる。

2区

- 201層：盛土。層厚0.15～0.25m。
- 202層：旧耕土。202'層はゴミ穴である。層厚0.1m前後。学校建設前の耕作土である。
- 203層：10YR4/3にぶい黄褐色シルト。層厚0.2～0.3m。中世の土師器の小片を含む。
- 204層：10YR5/2灰黄褐色シルト。層厚0.3m前後。中世の土師器の小片を含む。
- 205層：5YR5/2灰褐色粘質シルト。層厚0.15～0.25m。酸化鉄が斑点状に認められる。

3区

- 301層：盛上。層厚0.15～0.20m。
- 302層：10TR7/3にぶい黄褐色細礫混砂質シルト。層厚0.1m前後。
- 303層：10YR5/1褐灰色細礫混砂質シルト。層厚0.05～0.15m。
- 304層：10YR6/1褐灰色細礫混砂質シルト。層厚0.1m前後。
- 305層：2.5Y6/1黄灰色細礫混砂質シルト。層厚0.1m前後。北面に水田作土層が見られる。
- 306層：10YR5/1褐灰色中～細粒砂質シルト。層厚0.1m前後。古墳時代後期の遺構面と考えられる。
- 307層：10YR5/1褐灰色中～細粒砂。層厚0.1m前後。河川の堆積土である。
- 308層：10YR6/2灰褐色中～極粗粒砂。層厚0.15～0.25m。河川の堆積土である。
- 309層：10YR7/6明黄褐色細～中粒砂。層厚0.2m以上。河川の堆積土である。

4区

- 401層：盛土。層厚0.25～0.3m。
- 402層：盛土(瓦・ガラ等)。層厚0.15m前後。
- 403層：10YR5/1褐灰色細粒砂混シルト。層厚0.1～0.2m。粗砂を少量含む。
- 404層：10YR6/2灰黄褐色粘質シルト。層厚0.20～0.3m。
- 405層：5YR6/2褐灰色シルト。層厚0.05～0.1m。

406層：5YR6/1にぶい橙色細粒砂混シルト。層厚0.2m前後。

407層：5YR6/1褐灰色シルト。層厚0.1m以上。酸化鉄が斑点状に認められる。古墳時代後期の遺構検出面である。

5区

501層：盛土。層厚0.2m前後。

502層：10YR5/3にぶい黄橙色砂礫。層厚0.1m前後。

503層：10YR5/2灰黃褐色細粒砂混シルト。層厚0.15m前後。

504層：10YR6/2灰黃褐色細粒砂混シルト。層厚0.15～0.20m。酸化鉄が斑点状に認められる。

505層：N6/0灰色砂質シルト。層厚0.05～0.1m。酸化鉄が斑点状に認められる。

506層：10YR5/1褐灰色砂礫混砂質シルト。層厚0.15～0.2m。

507層：10YR7/3にぶい黄橙色極粗粒砂～細粒砂。層厚0.2m前後。

50A層：10YR4/1褐灰色砂質シルト。層厚0.1m。作土である。

50B層：2.5YR7/1灰白色砂質シルト。層厚0.05m。

6区

601層：盛土。層厚0.2～0.3m。

602層：10YR4/1褐灰色砂質シルト。層厚0.1m前後。北半部に堆積が見られる。

603層：10YR5/1褐灰色砂混砂質シルト。層厚0.1m前後。

604層：N7/0灰白色砂質シルト。層厚0.1～0.15m。水田の作土層である。酸化鉄が斑点状に認められる。

605層：N8/0灰白色砂質シルト。層厚0.2～0.25m。水田の作土層である。酸化鉄斑が見られる。

606層：2.5Y7/1灰色シルト。層厚0.1m前後。水田の作土層である。酸化鉄斑が見られる。

607層：N8/0灰色シルト。層厚0.1m前後。酸化鉄斑が見られる。

608層：2.5Y8/3淡黄色シルト。層厚0.1m以上。

7区

701層：盛土。層厚0.3～0.40m。

702層：5YR3/1黒褐色細粒砂混シルト。層厚0.10～0.15m。固くしまる。土師器・瓦器の破片を含む。

703層：7.5YR4/1褐灰色砂礫混シルト質上。層厚0.15～0.20m。固くしまる。土師器の破片を含む。

704層：7.5YR5/1褐灰色細粒砂混砂礫。層厚0.15m前後。古墳時代後期の土師器・須恵器・埴輪・製塙土器が多く含む。西へ緩やかに落込む。

705層：7.5YR6/2灰褐色砂礫混粗粒砂。層厚0.15～0.20m。土師器片を含む、古墳時代後期の遺構面と考えられる。

706層：7.5YR4/1褐灰色細粒砂混粘質シルト。層厚0.20m前後。遺構の埋土である。

707層：7.5YR6/2灰褐色粗粒砂。層厚0.25m以上。

8区

801層：盛土。層厚0.30m前後。

802層：IH耕土。層厚0.1m前後。水平堆積。

803層：10YR4/1褐色シルト。層厚0.05m前後。水平堆積。

804層：10YR6/2灰黃褐色粘質シルト。層厚0.2~0.4m。東側が厚く堆積する。

805層：7.5YR6/2灰褐色シルト。層厚0.1~0.15m。古墳時代後期の土器を含む。西半分に堆積する。

806層：7.5YR6/2にぶい褐色シルト。層厚0.1~0.3m。調査区中央部分が層厚となっている。

807層：5YR3/1黒褐色シルト。層厚0.15m以上。古墳時代前期の土器を多く含む。

9区

901層：盛土。層厚0.3m。

902層：旧耕土。層厚0.05m。

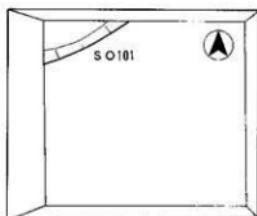
903層：10YR6/2にぶい黄橙色シルト。層厚0.4m。

904層：10YR6/1褐色シルト。層厚0.2m。古墳時代後期の土師器を含む。

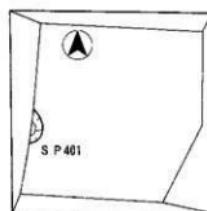
905層：2.5YR5/1黃灰色シルト。層厚0.15m。

第3節 検出遺構と出土遺物

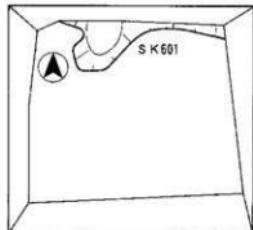
遺構は1、4、6、7区で検出した。遺物はすべての調査区より出土している。内訳は、古墳時代前期の古式土師器。古墳時代後期の土師器、須恵器、埴輪、製塩土器。鎌倉時代の土師器、瓦器等である。特に7区では古墳時代後期の土器が多く出土している。また、8区では1m以下



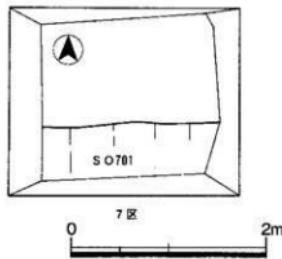
1区



4区



6区



7区

第3図 1、4、6、7区検出遺構平面図(S=1/50)

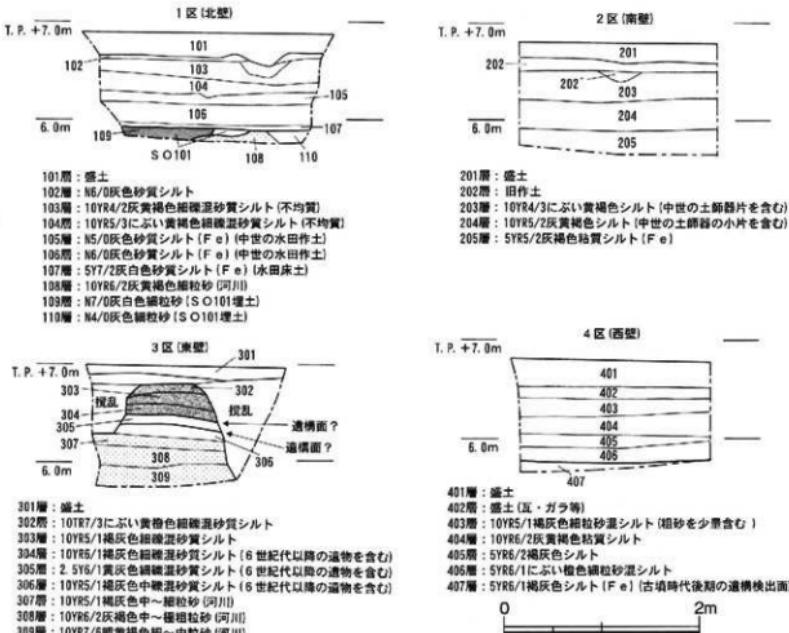
以下の層から古墳時代前期から後期の土器を多く含む層が確認されている。以下、検出した遺構について概説する。

1区—北西隅で落込み(SO101)1箇所を検出した。北部は調査区外に至る。検出部分で東西0.85m、南北0.45m、深さ0.15mを測る。埋土は、炭状の斑点が見られるN4/0灰白色細粒砂である。時期は古墳時代後期(6世紀代)に比定される土師器、須恵器の小片が出土している。

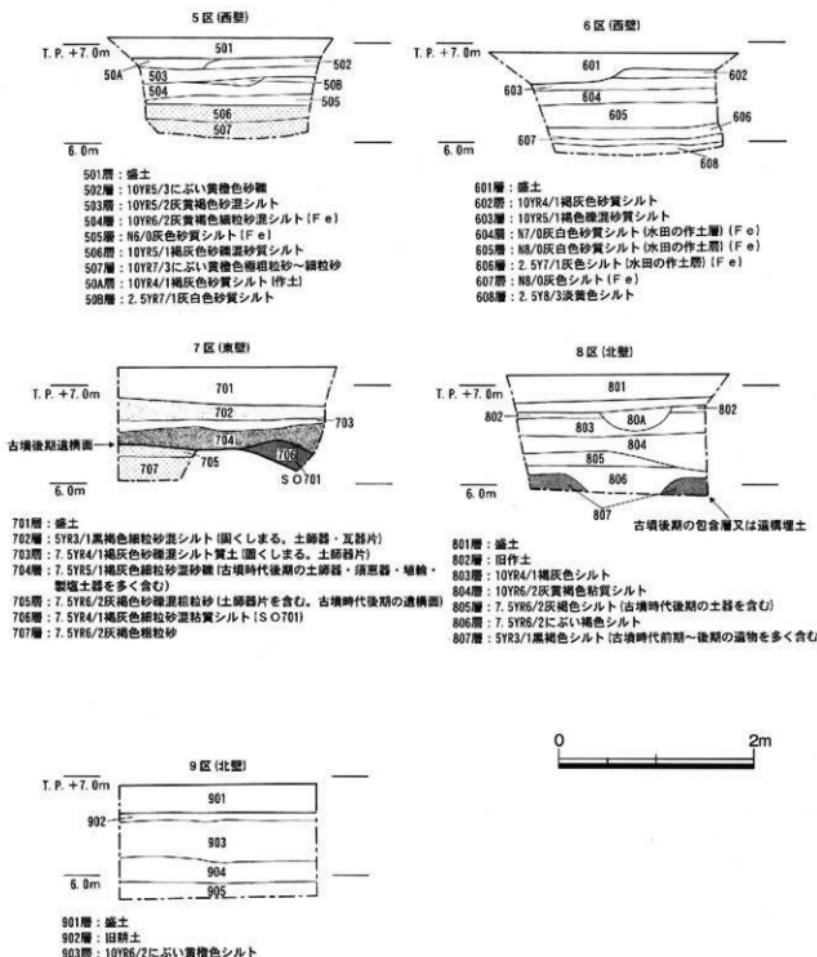
4区—西部で小穴(SP401)1個を検出した。西部は調査区外に至る。検出部分で東西0.12m、南北0.34m、深さ0.12mを測る。埋土は7.5YR4/1褐灰色粘質シルトである。遺物は土師器の小片が極少量出土している。

6区—北部で土坑状遺構(SK601)1基を検出した。北部は調査区外に至る。検出部分で東西1.7m、南北0.6m、深さ0.2mを測る。埋土は7.5YR4/1褐灰色シルトである。遺物は土師器小片が出土している。

7区—南部で落込み(SO701)1箇所を検出した。南部は調査区外に至る。検出部分で東西約1.9m、南北約0.6m、深さ0.16mを測る。埋土は7.5YR4/1褐灰色細砂混粘質シルトである。遺物は古墳時代後期の土師器、須恵器の小片が多く出土している。



第4図 1~4区断面図 (S=1/50)



第5図 5～9区断面図(S=1/50)

第3章 第27次調査

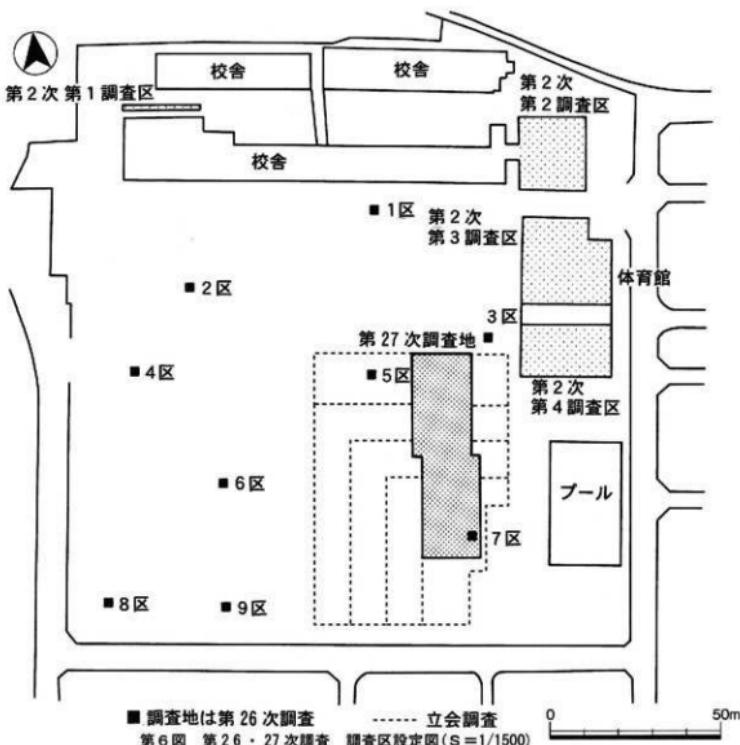
第1節 調査の方法と経過

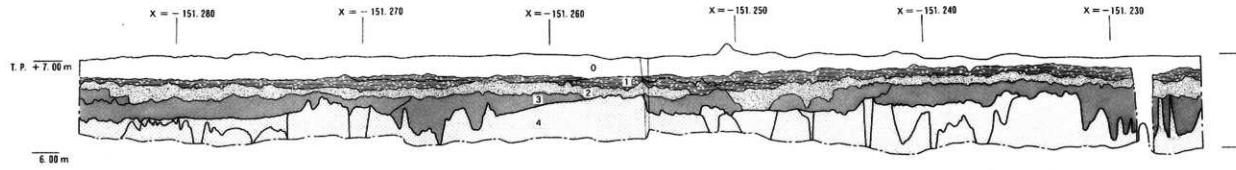
今回の調査は八尾中学校流域貯留浸透施設構造工事に伴うものである。第26次調査で検出された遺構構築面と流域貯留浸透施設の構築深度の関係から、発掘調査と立会調査に区別して行った。

発掘調査は八尾中学グランド南東部で実施した。南北方向に設置した調査区で、東西16m、南北60m、面積約960m²を測る。立会調査については、網目状に設定された透水管敷設部分(幅0.4m、延べ約392m)を対象として、遺物包含層の深度確認と遺物収集を主体とした調査を実施した。

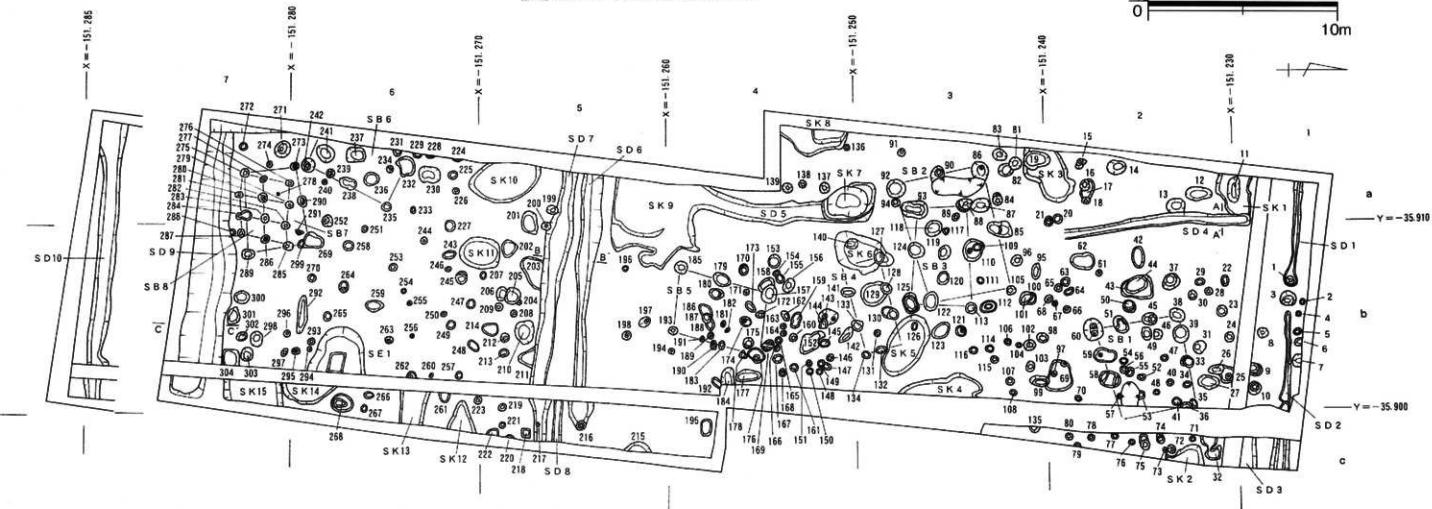
その結果、地表下0.4~0.7m(T.P.+6.60~6.35m)に存在する第4層上面で古墳時代中期から平安時代前半に比定される掘立柱建物8棟(SB1~SB8)、井戸1基(SE1)、溝10条(SD1~SD10)、土坑15基(SK1~SK15)、小穴304個(SP1~SP304)を検出した。

発掘・立会調査の結果、古墳時代中期から鎌倉時代後期に至る遺構を検出した。遺物は弥生時代





第0層：鈍土
第1層：7.SY6/1U 塗色粗粒砂質シルト
第2層：SY6/2に近い褐色粗粒砂質シルト
第3層：SY6/2底+オリーブ色細粒砂質粘土
7.SY6/2灰褐色粘土シルトのプロトク
第4層：SY6/1オリーブ色粗粒砂～細粒混砂質シルト



SPは数字のみ

第7図 平断面図 (S=1/200)



後期から中世に至る弥生土器、土師器、須恵器、製塙土器、瓦器、瓦類が出土しており、出土量はコンテナ箱に15箱程度である。

調査地の地区割りは、国土座標第VI座標系を基準とし、調査区北西部を基点として一区画単位は10m四方に区画した。地区的呼称は、東西方向はアルファベット(西からa～c)、南北方向は算用数字(北から1～7)で示し、地区的表示は1a～7c区と示した。地点の表示については、国上座標値を用いた。座標値は(1ラインが $X=-151.230,000$ 、aラインが $Y=-35.910,000$)である。

掘削に際しては、地表下0.35m前後までを機械掘削した後、以下0.5m前後については層理に従って人力掘削を実施した。

第2節 基本層序

現地表下(T.P.+7.00～7.10m)から調査対象面である約1m下部(T.P.+6.00～6.10m)までにおいて5層(第0層～第4層)を抽出し基本層序とした。

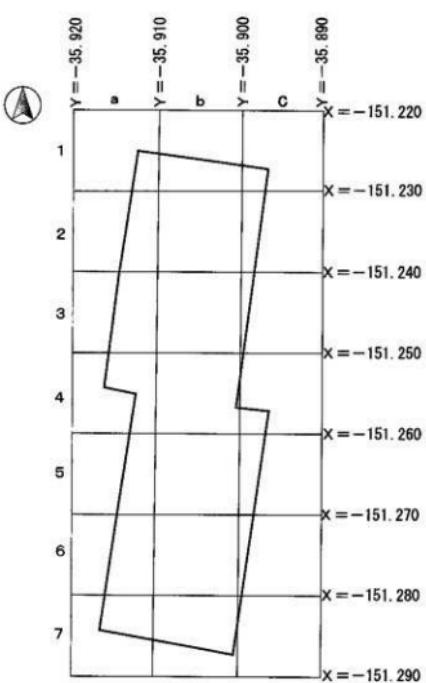
第0層：盛土。層厚0.2～0.25m。

第1層：7.5YR4/1褐色灰色砂礫混シルト。層厚0.05～0.1m。

第2層：7.5YR5/3にぶい褐色粗粒砂混シルト。層厚0.05～0.2m。古墳時代から奈良時代の遺物を少量含む。

第3層：5Y5/2灰オリーブ色細粒砂混極細粒砂と7.5YR6/2灰褐色粘質シルトのブロック。層厚0.1～0.6m。酸化鉄の斑点がみられる不均質な層相で、古墳時代前期～奈良時代の遺物を含む包含層および遺構内埋土を形成している。

第4層：5Y3/1オリーブ黒色細粒砂～細礫混砂質シルト。層厚0.6m以上。自然河川(小阪合分流路)に起因した堆積層で、上面の標高値は南部がT.P.+6.35m、北部がT.P.+6.60mで北に行くにしたがって高くなっている。細粒砂～中礫が優勢で、弥生時代から古墳時代前期前半(布留式前半)に比定される弥生土器、古式土師器を含む。上面で古墳時代中期から平安時代初頭に至る遺構を検出した。



第8図 調査区地区割り図(S=1/600)

第3節 検出遺構と出土遺物

1) 発掘調査の検出遺構

調査の結果、現地表下0.4~0.7m(T.P.+6.60~6.35m)に存在する第4層上面で、古墳時代中期から平安時代初頭に比定される掘立柱建物8棟(SB1~SB8)、井戸1基(SE1)、溝10条(SD1~SD10)、土坑15基(SK1~SK15)、小穴304個(SP1~SP304)を検出した。

掘立柱建物(SB)

調査を実施した第4層上面においては、古墳時代中期から平安時代初頭に至る長期間の居住域を示すように調査区全域に亘って遺構が周密に存在していた。そのうち、掘立建物を構成した可能性がある小穴(SP)は総数で304個(SP1~SP304)を検出している。規模が不揃で、円形・楕円形・不整円形を呈する小穴(SP)が密集して検出されており、単独の掘立柱建物を捉えることができたものは無い。また構築面である第4層が河川堆積に起因した砂礫層が中心で地下水位が低いことも相俟って柱根が遺存したもののが無いため、断面で柱痕を確認できた小穴と帰属時期が明確な土坑・溝との遺構配置から勘案して、総数で8棟(SB1~SB8)の掘立柱建物を想定した。

SB1

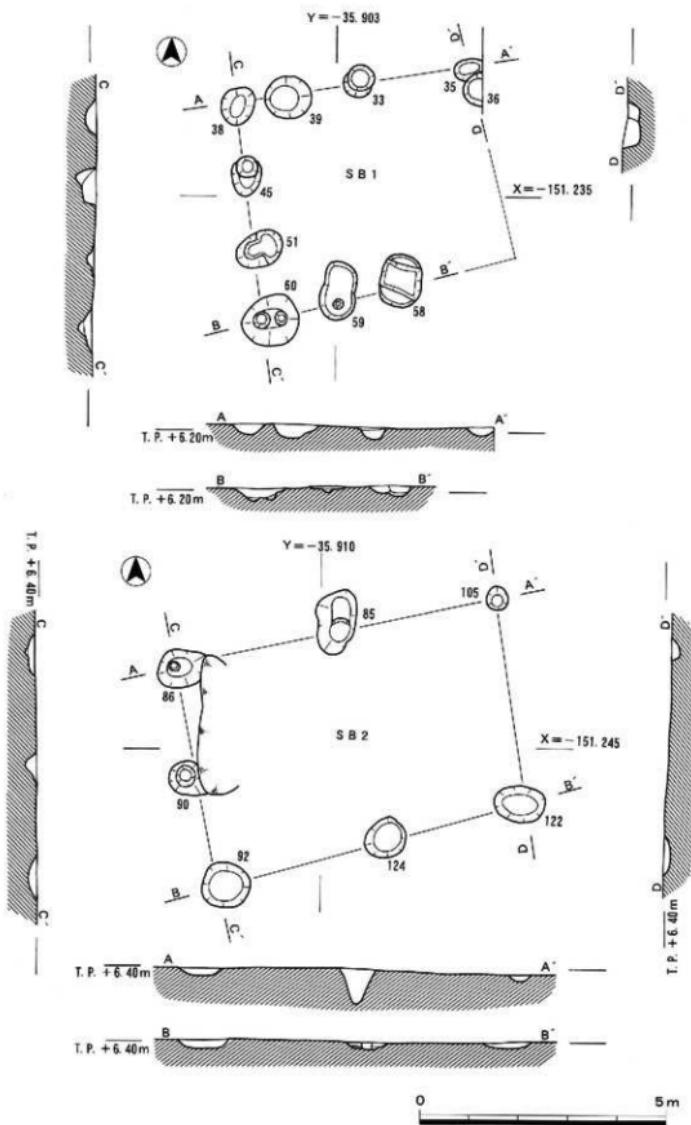
2b c区で検出した。部分的に柱穴が確認できない箇所はあったが、規模は東西2間(4.7m)×南北3間(4.5m)を測る。桁行(東西)方向の柱間2.5m、梁間(南北)方向の柱間1.5m前後を測る。主軸方向はN10°Wで、床面積約21.2m²を測る。柱穴はSP33・35・38・45・51・58・60で構成される。柱穴の形状は円形ないしは不整形で規模は幅0.44~1.13m、深さ0.19~0.4mを測る。埋土は1層ないしは2層である。南北の建物軸に並行するSD4との関係から奈良時代末から平安時代前期のものと推定される。

SB2

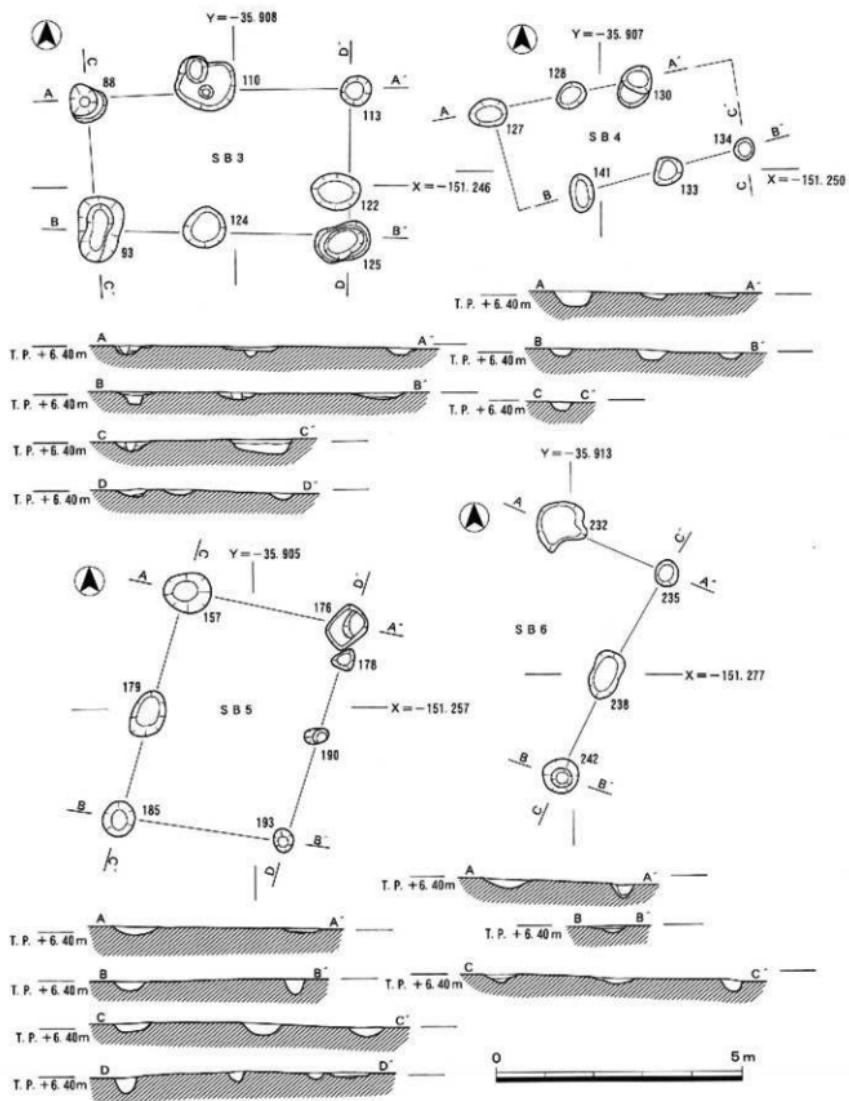
3a b区で検出した。一部の柱穴を欠くが、規模は東西2間(6.5m)×南北2間(4.5m)を測る東西棟建物である。桁行(東西)方向の柱間2.8~3.2m、梁間(南北)方向の柱間2.2m前後を測る。主軸方向はN13°Wで、床面積約29.3m²を測る。柱穴はSP85・86・90・92・105・122・124で構成される。柱穴の形状は円形ないしは楕円形で規模は幅0.62~1.28m、深さ0.14~0.33mを測る。埋土は1層ないしは2層で、SP124に柱痕が認められる。建物の南西端に近接する古墳時代後期中葉のSK7と同時期の小穴が建物付近に偏在することから、古墳時代後期の建物と推定される。

SB3

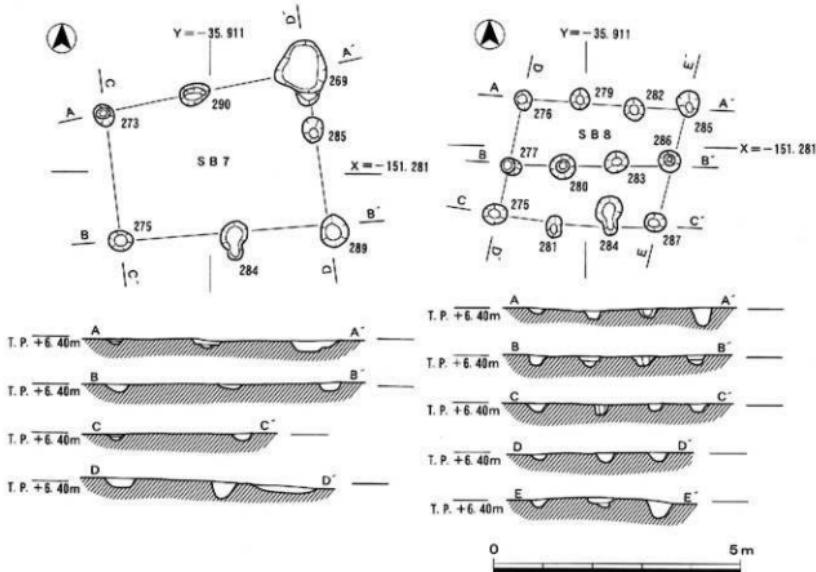
SB2の南東部に隣接している。規模は東西2間(5.0~5.5m)×南北1間(2.5~3.2m)を測る東西棟建物である。桁行(東西)方向の柱間2.3~2.8m、梁間(南北)方向の柱間2.5~3.0mを測る。主軸方向はN3°Wで、床面積約15.0m²を測る。柱穴はSP88・93・110・113・124・125で構成される。柱穴の形状は円形ないしは梢円形で規模は幅0.48~1.34m、深さ0.08~0.24mを測る。埋土は1層ないしは2層でSP88・124に柱痕が認められる。建物の南側に隣接するSK6や柱穴を構成したSP113の出土遺物から、飛鳥時代の建物と推定される。



第9図 SB 1、SB 2 平断面図 (S=1/100)



第10図 SB 3～SB 6 平断面図 (S=1/100)



第11図 SB7、SB8平断面図(S=1/100)

SB4

SB3の南に近接している。部分的に柱穴が確認できない箇所はあったが、規模は東西3間(5.0m)×南北1間(2.0m)を測る東西棟建物である。桁行(東西)方向の柱間1.5~1.7m、梁間(南北)方向の柱間2.0m前後を測る。主軸方向はN10°Wで、床面積10.0m²を測る。柱穴はSP127・128・130・133・134・141で構成される。柱穴の形状は不整円形ないしは楕円形で規模は幅0.4~0.9m、深さ0.1~0.24mを測る。埋土は1層から成る。柱穴(SP127)が飛鳥時代中期のSK6を切るため飛鳥時代中期以降の建物と考えられる。

SB5

4 b区で検出した。規模は東西1間(3.5m)×南北2間(4.5~4.8m)を測る南北棟建物である。桁行(南北)方向の柱間2.3~2.5m、梁間(東西)方向の柱間3.5mを測る。主軸方向はN16°Eで、床面積約16.3m²を測る。柱穴はSP157・176・179・185・190・193で構成される。柱穴の形状は不整円形ないしは隅丸方形で規模は幅0.34~1.0m、深さ0.11~0.36mを測る。埋土は1層ないし2層である。柱穴を構成する柱穴から出土した遺物から古墳時代後期の建物と推定される。

SB6

6 a区で検出した。西部は調査区外に至る。検出部分で、東西1間以上(3.3m以上)×南北2間(5.0m)を測る。桁行(東西)方向の柱間2.5m、梁間(南北)方向の柱間2.5m前後を測る。主軸方向はN27°Eである。柱穴はSP232・235・238・242で構成される。柱穴の形状は円形ないしは不整形で規模は幅0.5~1.07m、深さ0.15~0.32mを測る。埋土は1層ないし2層でSP235に柱痕

が認められる。建物の北に隣接する S K10(5世紀後半)、S K11(5世紀中)から古墳時代中期の建物と推定される。

S B 7

S B 6 の南東部に隣接している。規模は東西2間(4.2m)×南北1間(2.5~2.7m)を測る東西棟建物である。桁行(東西)方向の柱間1.9~2.2m、梁間(南北)方向の柱間2.7m前後を測る。主軸方向はN 8° Wで、床面積約11.0m²を測る。柱穴はS P 269・273・275・284・289・290で構成される。柱穴の形状は円形ないしは梢円形で規模は幅0.2~0.8m、深さ0.11~0.19mを測る。埋土は1層ないし2層である。東に近接するS E 1や建物軸との関係から奈良時代から平安時代前期の建物と推定される。

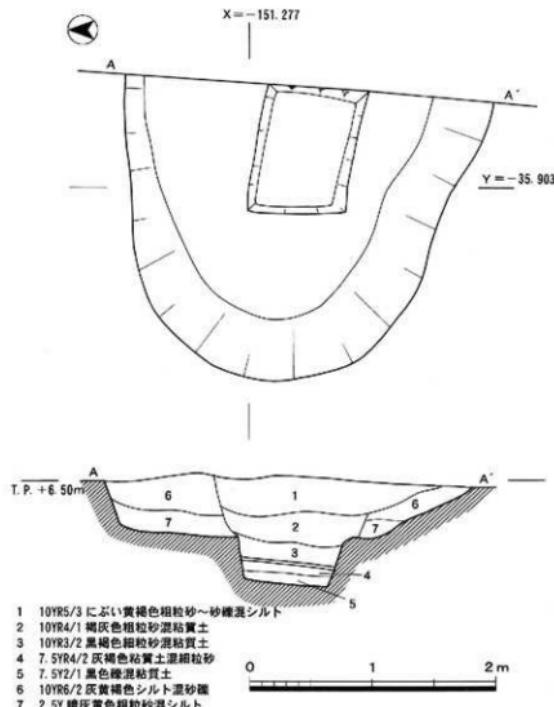
S B 8

S B 7 と重複している。規模は東西3間(3.4m)×南北2間(2.5m)を測る総柱の東西棟建物である。桁行(東西)方向の柱間1.0m前後、梁間(南北)方向の柱間1.1~1.3mを測る。主軸方向はN 14° Eで、床面積8.5m²を測る。柱穴はS P 275~277・279~287で構成される。比較的小規模な柱穴が大半で、形状は円形ないしは不整形で規模は幅0.28~0.8m、深さ0.12~0.4mを測る。埋土は1層ないし2層でS P 281~283に柱痕が認められる。時期的には、S B 6 と同様の古墳時代中期が推定される。

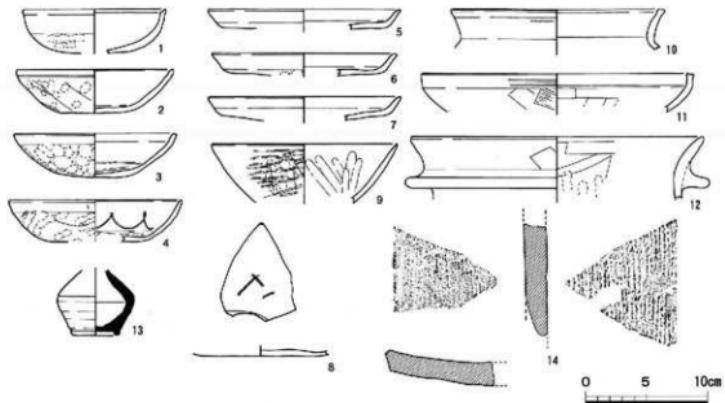
井戸(S E)

S E 1

6 b 区で検出した。井戸側に方形木枠を用いた井戸であるが東部は既存水路により削平を受けており全容は不明である。検出部分の法量は東西幅2.45m、南北幅3.05m、深さ0.9mを測る。残存部分からみて、東西方向に長い梢円形掘方の中央部に長方形の木組井戸側を東西方向に設置している。木組井戸側は、構築面から約0.5mの地点以下で検出した。木組井戸側は横



第12図 S E 1 平断面図 (S = 1/40)



第13図 S E 1出土遺物実測図

棟部分の木質が井戸側の中位で僅かに確認できることから、縦板組横桟どめの構造であったと推定されるが、横桟に取り付く縦板の板材は腐食のため確認できなかった。井戸枠の法量は、検出部分で東西幅1.05m、南北幅0.82m、深さ0.36mを測る。埋土は、掘方部分が2層(6・7層)で、井戸側内は5層(1～5層)堆積していた。遺物は井戸側上部にあたる1・2層および井戸側内の3～5層から土師器、須恵器、黒色土器、屋瓦が出土している。14点(1～14)を図化した。井戸側内(3～5層)出土の3を除いた他は1・2層からの出土である。1は土師器杯Aで約1/3が残存している。復原口径12.8cm、器高4.1cmを測る。口縁部内端面は内傾する小端面の中央が沈線状に瘤む他、外端面はヨコナデにより小さく外反している。内面はナデの後、細筋の暗文が施文されている。2～4は土師器椀Aである。2は約1/3が残存している。復原口径は14.2cmを測る。3は井戸側内部から出土した。ほぼ完形で口径14.0cm、器高4.0cm、底径6.0cmを測る。器面調整は内面から外面口縁部はヨコナデ、以下の体部は指頭圧痕が顕著に残る。4は約1/3が残存している。復原口径15.6cmを測る。体部内面に連弧状の暗文が施文されている。5～7は土師器皿Aである。残存率は5が約1/5、6が約1/8、7が約1/4である。復原口径は16.4～17.4cmを測る。5・7は口縁部が斜上方に直線的、6は中位で小さく外反して伸びる。8は土師器皿Aの底部片で、裏面に墨書きが認められるが判読できない。9は黒色土器のA類椀の口縁部片である。復原口径16.9cmを測る。10は土師器甕Aの口縁部片である。口縁端部は水平で中央部が瘤む端面を持つ。外面に煤が付着している。11は口縁部が小さく逆「く」の字状を呈する流し口のある土師器鉢の細片である。口縁端部は内傾して中央部が瘤む。12は土師器羽釜の口縁部片である。復原口径26.4cmを測る。鍔は張り出しが小さく水平方向に貼り付けられている。13は貼付け高台を有する須恵器小形壺で、口頭部を欠く。体部は算盤玉状の形状で、残存高5.9cm、高台径4.4cm、高台高0.5cm、体部最大径7.0cmを測る。14は平瓦片である。凹面にやや粗い布目、凸面に縦位の綱叩き痕を残す。調査地から南約600mに存在した東郷廃寺に使用された瓦と推定される。出土遺物の組成から、遺構の帰属時期は佐藤氏編年平安時代II期古(9世紀1～3四半世紀)に比定される。

土坑(SK)

SK 1

調査地北西部の1・2a区で検出した。不整形を呈するもので、西端は調査区外、東端はSD4に切られる他、中央部にSP11が存在している。検出部分で東西幅2.12m、南北幅1.82m、深さ0.18mを測る。埋土は10YR4/1褐色砂礫混シルトである。遺物は土師器、須恵器の細片が極少量出土しているが時期を明確にし得たものは無い。

SK 2

2C区で検出した。東端は調査区外に至る。検出部分で東西幅1.0m、南北幅2.0m、深さ0.24mを測る。埋土は10YR4/1褐色砂礫混シルトである。遺物は古墳時代後期に比定される土師器杯・高杯・甕、須恵器甕・杯身の細片が出土している。2点(15・16)を図化した。15は須恵器杯蓋の細片である。復原口径10.0cmを測る。田辺編年式のTK43型式(6世紀後半)に比定される。16は土師器小形鉢で約1/4が残存している。復原口径13.5cm、器高3.2cmを測る。口縁端部が内傾し幅広の端面を持つ同時期に通有な小形鉢である。出土遺物から遭構の帰属時期は古墳時代後期後半に比定される。

SK 3

2・3a区で検出した。西端は調査区外に至る他、SP19に切られている。検出部分では不整形を呈しており、東西幅2.95m、南北幅2.12m、深さ0.13mを測る。埋土は10YR4/1褐色砂礫混シルトである。遺物は土師器、須恵器、製塙土器の細片が極少量出土したが、時期を明確にし得たものや図化し得たものはない。

SK 4

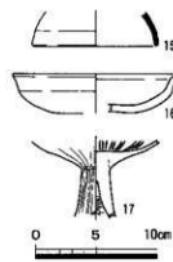
3b区で検出した。東端は調査区外に至る。検出部分で南北方向に長い不整楕円形を呈している。東西幅1.35m、南北幅4.48m、深さ0.15mを測る。埋土は10YR4/1褐色砂礫混シルトである。遺物は土師器の細片が極少量出土したが時期を明確にし得るものは無い。

SK 5

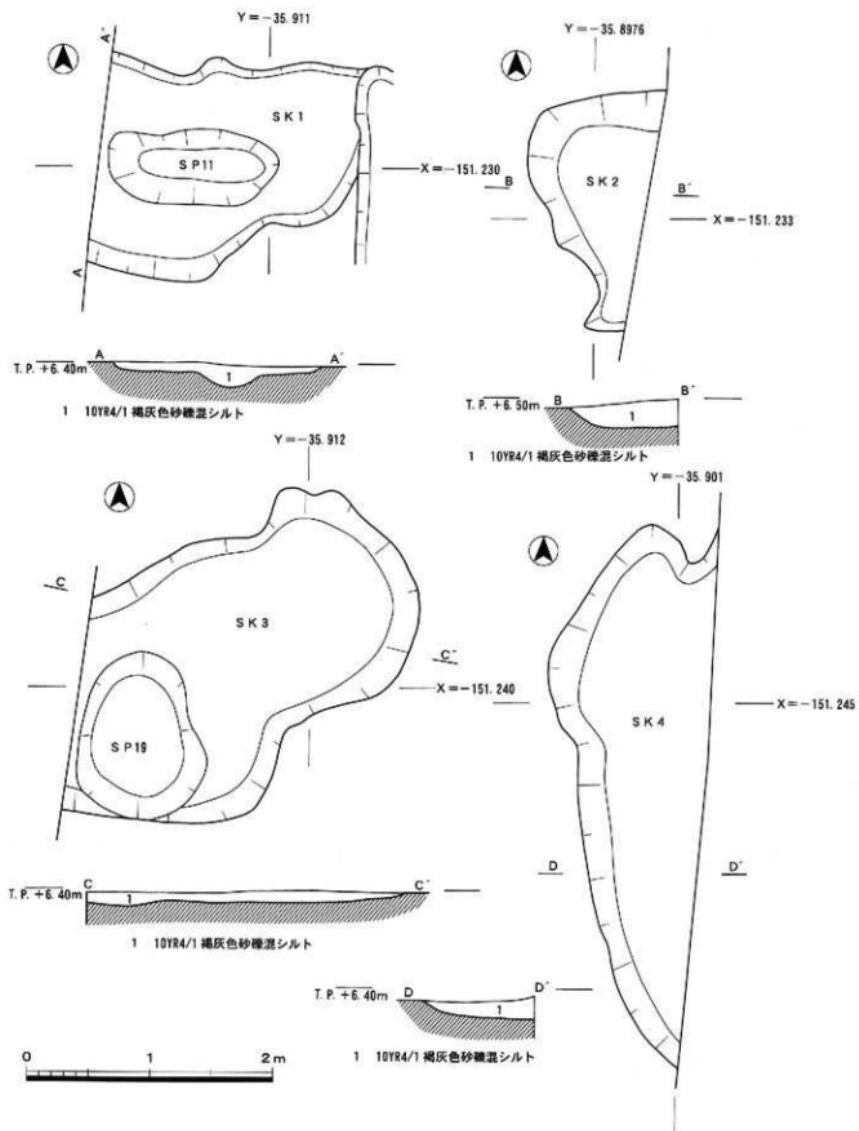
3b区で検出した。楕円形を呈するもので、北部にSP126が存在している。長径3.52m、短径1.85m、深さ0.15mを測る。埋土は10YR4/1褐色砂礫混シルトである。遺物の出土は無く時期は明確にし難い。

SK 6

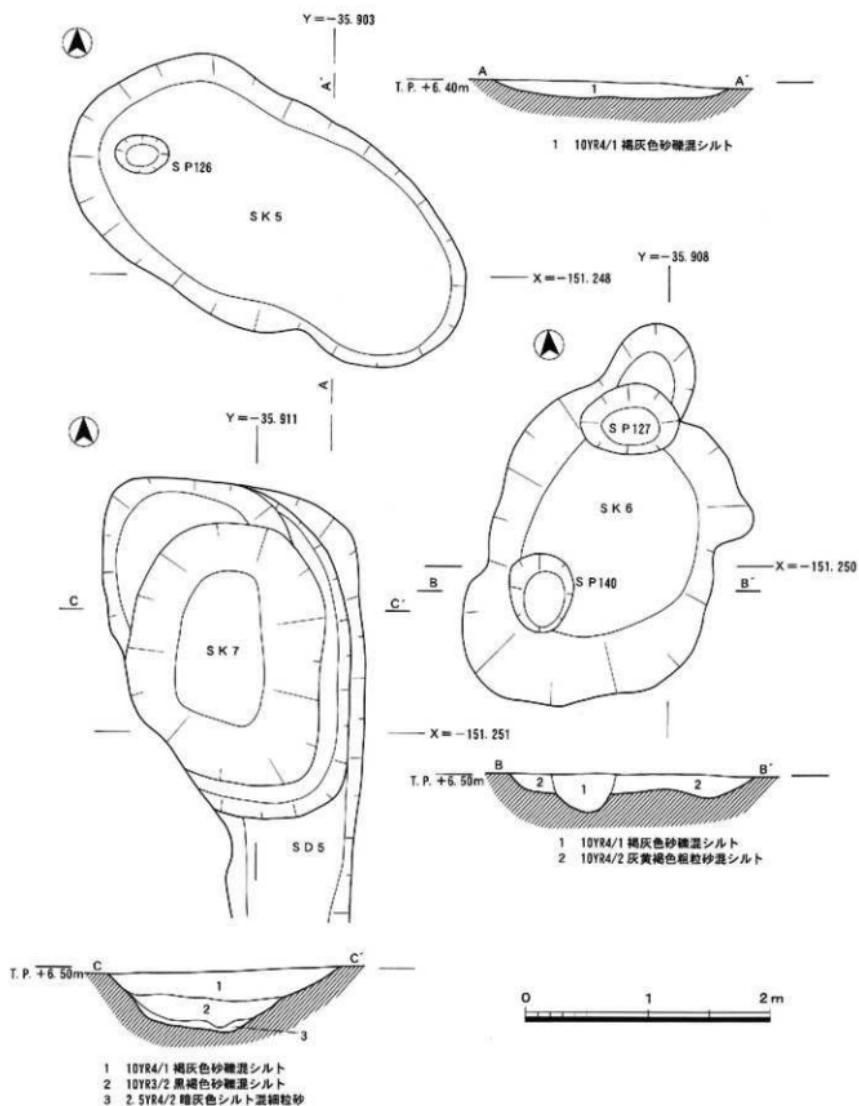
3・4b区で検出した。不整楕円形を呈するもので、北部でSP127、南部でSP140に切られている。長径3.28m、短径2.04m、深さ0.24mを測る。埋土は1層10YR4/1褐色砂礫混シルト、2層10YR4/2灰黃褐色粗粒砂混シルトである。遺物は飛鳥時代の土師器高杯片や須恵器片が出土している。1点(17)を図化した。17は土師器高杯である。杯部中位から脚部中位が残存している。杯底部に放射状ヘラミガキが施されている。出土遺物から遭構の帰属時期は、飛鳥時代前期から中期に比定される。



第14図 SK 2(15・16)、SK 6(17)出土遺物
実測図



第15図 SK1～SK4平断面図 ($S=1/40$)



第16図 SK 5~SK 7 平断面図 (S=1/40)

S K 7

S K 6 の西側に隣接している。一部、二段掘方を呈する不整形で、南部で S D 5 に取り付く。東西幅1.92m、南北幅2.72m、深さ0.5mを測る。埋土は1層10YR4/1褐色砂礫混シルト、2層10YR3/2黒褐色砂礫混シルト、3層2.5YR4/2暗灰黄色シルト混細粒砂である。遺物は1・2層から古墳時代後期前半から中葉に比定される土師器高杯・甕・土釜、須恵器杯身・高杯、製塙土器が出土している。2点(18・19)を図化した。18は須恵器杯蓋の細片である。復原口径15.3cm。

田辺編年のTK15型式(6世紀前半)に比定される。19は須恵器無蓋高杯の口縁部から体部の細片である。復原口径15.0cmを測る。口縁部と体部は二段の稜で区画され、体部上位には波長が小さい櫛描き波状文1条が施文されている。田辺編年のMT15型式(6世紀前半)に比定される。遺構の帰属時期は古墳時代後期前半が推定される。

S K 8

4 a 区で検出した。西部は調査区外に至る。検出部分で東西幅1.52m、南北幅3.62m、深さ0.16mを測る。埋土は10YR4/1褐色砂礫混シルトである。遺物は古墳時代中期から飛鳥時代に比定される土師器、須恵器片が出土している。

S K 9

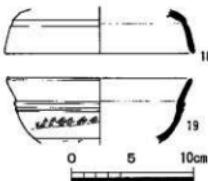
4・5 a b 区で検出した。比較的規模が大きい不整形を呈する土坑で、西部は調査区外である他、北部は S D 5 に続く。検出部分で東西幅4.6m、南北幅4.3m、深さ0.3mを測る。埋土は10YR4/1灰黄褐色粗粒砂混シルト、2層10YR4/1褐色粗粒砂混シルトである。遺物は奈良時代後期から平安時代前期に比定される土師器甕・鉢・杯・瓶・壺、須恵器壺・鉢・杯蓋・杯身の細片が出土している。3点(20~22)を図化した。20・21は共に口縁部から体部上位にかけての土師器甕の細片である。復原口径は20が14.4cm、21が14.6cmを測る。21は外反して開く口縁部外面にヨコナデを施すことで体部との境を明瞭にしている。口縁端部は丸味を持ち小さく内側に肥厚している。22は須恵器甕口縁部の細片である。復原口径18.7cmを測る。口頸部は緩やかに外反するもので、端部は垂下して丸味を持って終わる。時期幅のある遺物が出土しているが、最も新しい遺物から遺構の帰属時期は平安時代前期と推定される。

S K 10

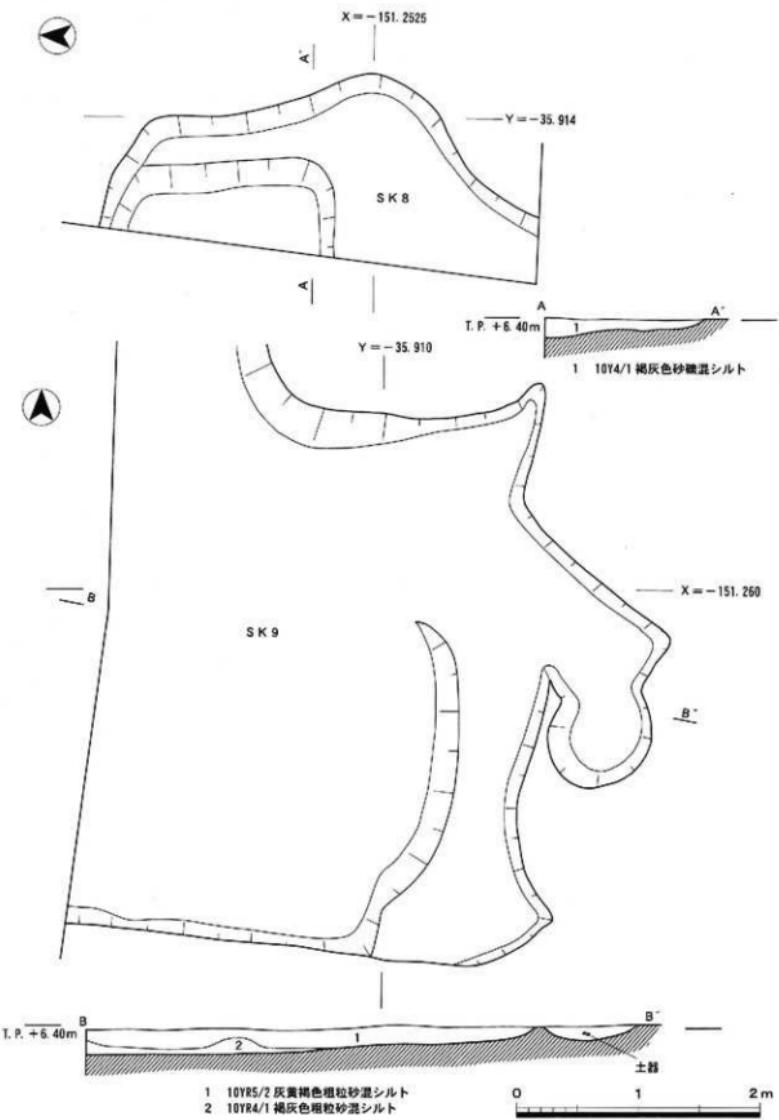
5・6 a 区で検出した。西部は調査区外に至る。検出部分からみて梢円形を呈するものと推定され、検出部分で東西幅2.22m、南北幅3.8m、深さ0.19mを測る。埋土は1層10YR4/2灰黄褐色粗粒砂混シルトである。遺物は古墳時代中期の土師器甕・高杯、須恵器杯蓋・高杯、製塙土器が少量出土している。大半が細片で、図化したものは須恵器杯蓋1点(23)のみである。23はほぼ完形品で口径12.1cm、器高4.5cm、稜部径12.1cm、口縁部高2.2cmを測る。田辺編年のTK23型式(5世紀後半)に比定される。出土遺物から遺構の帰属時期は古墳時代中期後半が推定される。

S K 11

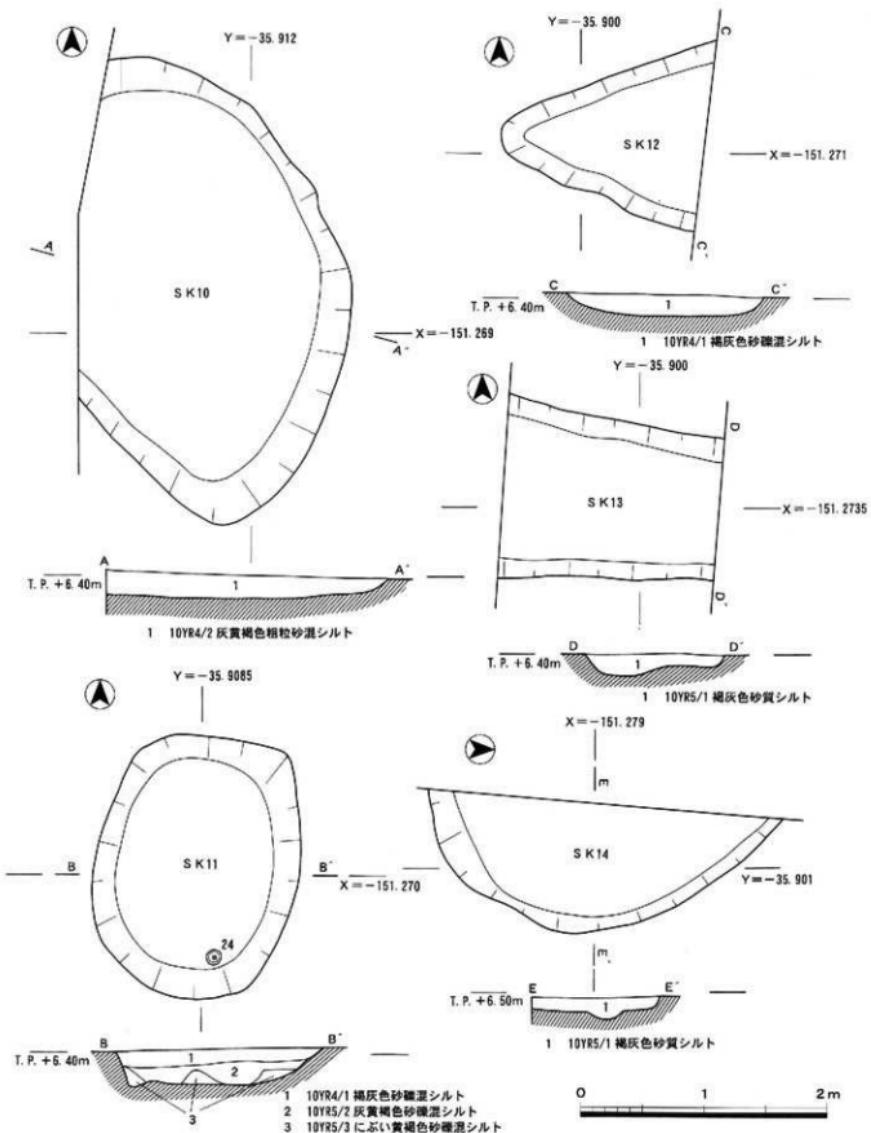
S K 10の東2mに位置している。南北方向に長い梢円形を呈するもので、東西径1.64m、南北径2.08m、深さ0.24mを測る。埋土は1層10YR4/1褐色砂礫混シルト、2層10YR5/2灰黄褐色砂



第17図 SK 7出土遺物実測図



第18図 SK 8、SK 9 平断面図 ($S=1/40$)



第19図 SK10～SK14 平断面図 (S=1/40)

砂礫混シルト、3層
10YR5/3にぶい黄褐色
砂礫混シルトである。
遺物は古墳時代中期に
比定される土師器細片
のほか須恵器高杯・杯
蓋が出土している。2
点(24・25)を図化した。
24は須恵器有蓋高杯蓋
である。完形品で口径
11.9cm、器高5.2cm、つ
まみ径2.8cm、つまみ高
0.9cmを測る。やや丸味
のある天井部に小振り
のつまみが付くものである。

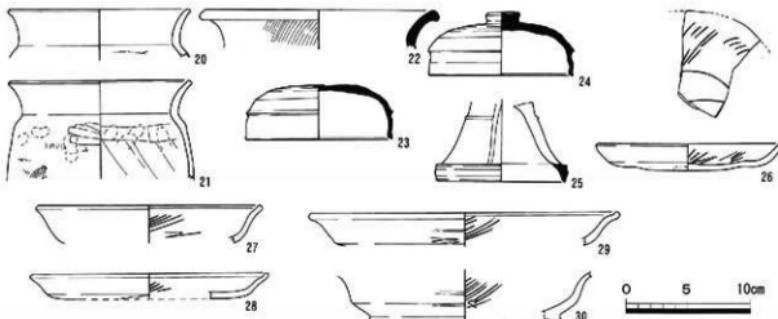
外面全体に灰かぶりが認められる。内面天井部には、ほぼ全面わたって漆膜の付着が認められるため漆を入れる容器の蓋として使われた可能性がある。25は低脚の高杯脚部片である。脚部外面の上位に1条の隆起の小さい稜線が巡る。24・25共に田辺編年のT
K208型式(5世紀中葉)に比定される。遺構の帰属時期は古墳時代中期中葉(5世紀中葉)である。

S K12

6 c 区で検出した。東部は調査区外に至る。検出部分で東西幅1.66m、南北幅1.6m、深さ0.18mを測る。埋土は10YR4/1褐灰色砂礫混シルトである。遺物は土師器の細片が極少量出土しているが、時期を明確にし得たものはない。

S K13

6 b c 区で検出した。東西方向に溝状に伸びるもので、西端は既存水路、東端は調査区外に至る。東西幅1.76m、南北幅1.52m、深さ0.18mを測る。埋土は10YR5/1褐灰色砂質シルトである。遺物は弥生土器、土師器の細片が出土しているが、時期を明確にし得たものはない。



第20図 SK15 平断面図(S=1/40)

S K14

6・7 b 区で検出した。西部は搅乱により不明である。検出部分で東西幅1.06m、南北幅2.92m、深さ0.17mを測る。埋土は10YR5/1褐色灰色砂質シルトである。遺物は飛鳥時代に比定される土師器高杯、須恵器細片が出土している。既存の水路部分を挟んで平安時代前期の井戸(S E 1)が構築されているため、西部はS E 1に切られたものと推定される。

S K15

7 b 区で検出した。西部は既存水路、東部は調査区外に至る。検出部分で東西幅1.2m、南北幅3.05m、深さ0.08~0.23mを測る。埋土は10YR4/1褐色灰色砂礫混シルトである。出土遺物は、一部古墳時代中期のものを含むが、奈良時代中期に比定される土師器類の細片が大半を占めている。5点(26~30)を図化した。26は土師器皿Aである。27~29は土師器杯Aの細片である。体部内面に放射状に施文された暗文が認められる。30は高台を有する土師器皿Bである。出土遺物から構築の構築時期は奈良時代中期が推定される。

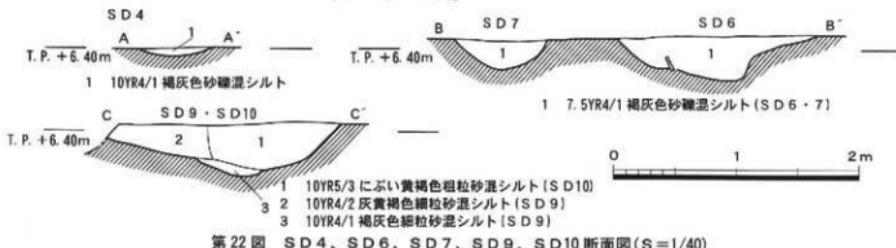
溝(S D)

S D 1

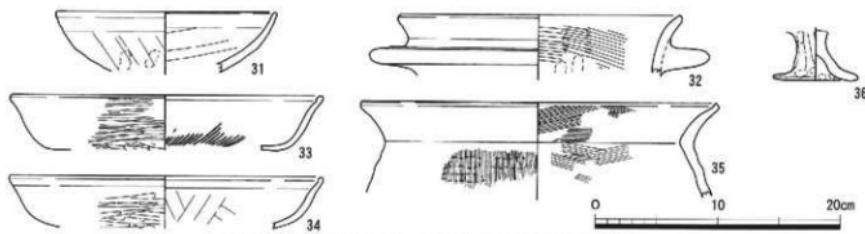
調査区北部の1 a b 区で検出した。東西方向に直線的に伸びるもので、検出長5.52m、幅0.22~0.48m、深さ0.06mを測る。埋土は10YR4/1褐色灰色砂礫混シルトである。遺物は出土していないため帰属時期は不明。

S D 2

S D 1 の東端から約1.4mの間隔を空け東西方向に直線的に伸びるもので、東端は調査区外に至る。検出長8.44m、幅0.22~0.92m、深さ0.06mを測る。埋土は10YR4/1褐色灰色砂礫混シルトである。遺物は出土していないため帰属時期は不明。



第22図 S D 4、S D 6、S D 7、S D 9、S D 10 断面図(S=1/40)



第23図 S D 4 (31~32)、S D 6 (33~36) 出土遺物実測図

S D 3

調査区北東部で検出した。東西方向に伸びるもので、東端および南肩は搅乱により削平されおり東部は調査区外に至る。検出長1.66m、幅0.65~0.9m、深さ0.18mを測る。埋土は10YR4/1褐色砂礫混シルトである。遺物は飛鳥時代から奈良時代に比定される土師器の細片が極少量出土したが図化し得たものは無い。

SD 4

調査区北西部の1・2a b区で検出した。ほぼ座標軸に沿って南北に伸びる小溝で、全長9.8m、幅0.46~0.68m、深さ0.05mを測る。埋土は10YR4/1褐色砂礫混シルトである。遺物は一部の遺物を除けば、平安時代前期を中心とする土師器碗・羽釜・須恵器片・丸瓦片が出土している。2点(31・32)を図化した。31は土師器碗の口縁部片である。復原口径15.7cmを測る。32は土師器羽釜片である。復原口径20.1cmを測る。鈙は厚みがあり、水平方向に貼り付けられている。31・32共に平安時代前期に比定される。遺構の帰属時期は平安時代前期である。

SD 5

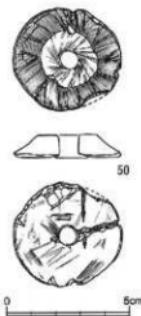
3・4a区で検出した。北端のSK7、南端のSK9を繋いで南北方向に伸びる。全長6.2m、幅0.96~1.14m、深さ0.15mを測る。埋土は10YR4/1褐色砂礫混シルトである。遺物は出土していない。

SD 6

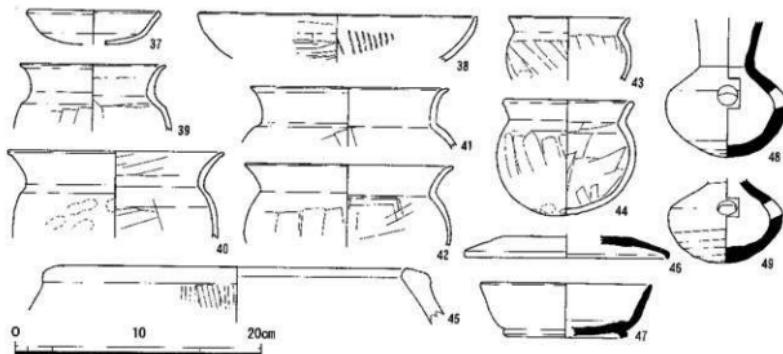
5a~c区で検出した。東西方向に伸びるもので、西端は調査区外に至る。検出長13.7m、幅0.46~1.0m、深さ0.3mを測る。埋土は7.5YR4/1褐色砂礫混シルトである。遺物は古墳時代中期から奈良時代前期に比定される土師器類・須恵器類がコンテナ箱1/3程度出土しているが、細片化したもののが大半を占めている。4点(33~36)を図化した。33・34は土師器杯Aの細片である。復原口径は33が22.2cm、34が22.5cmである。33の体部内面に放射状暗文、体部外面に横方向のヘラミガキが施されている。35は土師器長胴壺の口縁部から体部の細片である。復原口径25.6cmを測る。口縁部は「く」の字に屈曲するもので、端部はやや内傾し小端面を形成している。36は土師器小形高杯の脚部である。手づくね品で、全体に雑な作りである。4点ともに奈良時代前期に比定される。遺構の帰属時期は奈良時代前期である。

SD 7

SD 6の南に隣接して、並行して伸びる。東西端は調査区外に至る。検出長14.5m、幅0.62~1.45m、深さ0.2mを測る。埋土は7.5YR4/1褐色砂礫混シルトである。遺物は古墳時代後期前半~後半、奈良時代中期に比定される土師器類・須恵器類・石製品類がコンテナ箱1/3程度出土しているが細片化したもののが大半を占めている。14点(37~50)を図化した。37は土師器杯Aである。約1/3が残存している。38は土師器皿Aの口縁部細片である。復原口径22.5cmを測る。39~42は土師器小形壺Aの細片である。4点とも口縁部から体部上位の細片である。復原口径は39が11.8cm、40が17.4cm、41が16.0cm、42が16.7cmを測る。43・44は球形の体部に外反する口縁部が付く土師器小形壺Bである。43は復原口径9.9cmを測る。44は約1/2が残存。口径10.4cm、器高9.6cmを測る。45は土師器壺の口縁部から体部上位



第24図 SD 7出土遺物実測図1



第25図 SD 7出土遺物実測図2

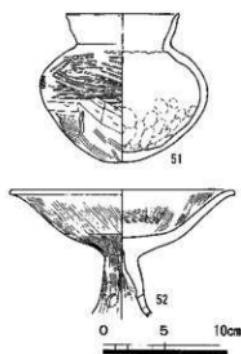
の細片である。幅広の口縁面に叩き板による凹凸面がある他、体部上位に単位幅の広い綫位のハケが施されている。46は須恵器杯B蓋の細片である。復原口径16.6cmを測る。奈良時代前期。47は須恵器杯Bである。約1/3が残存している。復原口径13.9cm、器高1.45cmを測る。奈良時代前期。48・49は須恵器瓦類で48は頸部下位以上、49は口頭部を欠く。共に体部は完存しており、48が残存高11.3cm、体部最大径9.9cm、49が残存高6.9cm、体部最大径9.3cmを測る。注口を繋ぐ円孔は体部中位よりやや上部に設けられている。共に外面体部の上面に灰かぶりが認められる。奈良時代前期に比定されるMT21に類例が認められる。50は台形状を呈する滑石製の紡錘車で中央部に穿孔を有する。一部、側面端を欠く以外は完存している。法量は上端幅2.4cm前後、下端幅4.1cm、高さ0.9cm、穿孔径0.8cmを測る。側線の2ヶ所に小さく打ち欠いた部分があり、そのうちの1ヶ所は裏面中央の穿孔部分に向かって細く浅い溝状に直線的に削られている。石材は滑石製である。時期幅のある遺物を含むが、造構の帰属時期は奈良時代前期と推定される。

SD 8

SD 6とSD 7東部の間で検出した。東西方向に直線的に伸びる小溝で、西端は攪乱により削平、東端は調査区外に伸びる。検出長2.26m、幅0.42m、深さ0.30mを測る。埋土は10YR4/1褐色灰色砂礫混シルトである。遺物は古墳時代後期(6世紀代)に比定される土師器類、須恵器類の細片が少々出土しているが図化し得たものは無い。

SD 9

調査区南端部分の7a～c区で検出した。東西方向に伸びるもので、上部は本溝に沿って東西方向に伸びる鎌倉時代の溝(SD10)に切られている。検出長16.0m、幅1.22～2.38m、深さ0.36mを測る。埋土は10YR4/2灰褐色細粒砂混シルト、10YR4/1褐色細粒砂混シルトである。遺物は上部を切るSD10の関係から、時期幅が認められる遺物が混在して出土しているが、上部



第26図 SD 9出土遺物実測図

から集中する形で埋土した土師器壺・高杯から見て古墳時代中期前半の遺構と推定される。2点(51・52)を図化した。51は扁球形の体部に直上方に伸びる口縁部が付く小形の上師器壺である。約2/3が残存している。口径9.1cm、器高12.3cm、体部最大径13.7cmを測る。体部外面の器面調整は上位に横位のヘラミガキ、下位にヘラケズリとハケが施されている。内面は底部を中心に指頭川痕が残る。52は土師器高杯で裾部を欠く。残存高10.4cm、杯部口径18.0cmを測る。杯体部の縫が無く、口縁部は斜上方に直線的に伸びた後、小さく外反して外傾する小端面を作る。杯部外面の器面調整は口縁部を除きハケが多用されている。遺構の帰属時期は古墳時代中期前半と推定される。

S D 10

東西方向に伸びるS D 9流路の北肩に沿って伸びるもので、S D 9の埋没後に開削された溝である。検出長16.0m、幅0.45m、深さ0.17mを測る。埋土は10YR5/3にぶい黄褐色粗粒砂混シルトである。遺物は古墳時代中期のS D 9を切るために、古墳時代中期以降に比定される土師器類、須恵器類のはか、鎌倉時代後期(13世紀後半)の瓦器焼片を含むため遺構の帰属時期は鎌倉時代後半と推定される。なお、位置的には、若江郡(北部条里)の六条と七条の里境にあたるため、里境を区画する東西溝であった可能性がある。遺物はすべて細片のため図化したものは無い。

小穴・柱穴(S P)

総数で304個(S P 1～S P 304)を検出した。同一面で、古墳時代中期から平安時代初頭に至る長期間の居住域を形成した掘立柱建物群を構成した小穴が全城に亘って広く分布していた。小穴の平面形状では、円形・楕円形・不整形が中心で方形を量するものは少ない。規模は幅0.12～2.10m、深さ0.02～0.40mを測る。また、構築面が河川跡に特有な細縫を中心とする層相で、地下水位が低い条件もあり柱根が遺存したものは皆無であるため、断面で確認される柱痕を手掛かりとして掘立柱建物を構成した小穴を想定した。なお法量等の詳細は第2表に委ねた。

小穴出土遺物-17点(53～69)を図化した。53は口縁端部内面に小端面を有する上師器鉢で、約1/2が残存している。復原口径10.9cm、器高5.2cmを測る。古墳時代中期のものか。S P 180出土。54・55は土師器杯Aの細片である。共に体部内面に放射状暗文が施されている。奈良時代中期。54がS P 32、55がS P 218出土。56は土師器長脚壺の細片。復原口径18.9cmを測る。奈良時代。S P 167出土。57は土師器高杯Bの杯部から脚部中位が残存。飛鳥時代前期から中期。S P 210出土。58～61は製塙上器で薄手丸底式に分類される。色調は59が黒色、58・60・61が淡灰白色である。古墳時代中期。S P 301出土。62・69は須恵器壺の口縁部から体部上位の細片である。62が小形壺、69が大形壺である。復原口径は62が13.7cm、69が22.0cmである。62が古墳時代後期、69が飛鳥時代後期から奈良時代前半。62がS P 92、69がS P 211出土。63～66は須恵器杯身である。63・64が受部を持つもので、63が田辺編年のTK43型式(6世紀後半)、64がTK10型式(6世紀中葉)である。65・66は高台を有するもので、奈良時代。63がS P 176、64がS P 245、65がS P 210、66がS P 211出土。67は有蓋高杯の杯部で約1/3が残存している。受部以下に黒色の釉薬塗布されている。田辺編年のTK23型式(5世紀後半)。S P 232出土。68は須恵器高杯の脚部である。田辺編年のTK208型式前後のものと推定される。S P 245出土。

第2表 小穴・柱穴法量表(単位m)

遺構番号	地区	上面形状	法量			出土遺物・備考
			長径	短径	深さ	
S P 1	1 b	円形	0.47	0.42	0.16	
S P 2	"	"	0.26	0.28	0.08	
S P 3	"	"	0.84	0.76	0.18	
S P 4	"	"	0.28	0.27	0.06	
S P 5	"	"	0.41	0.36	0.10	
S P 6	"	"	0.46	0.36	0.24	
S P 7	"	"	0.74	0.50	0.22	
S P 8	"	"	0.61	0.60	0.16	土師器、須恵器
S P 9	"	横円形	0.70	0.67	0.19	
S P 10	"	円形	0.72	0.70	0.14	土師器(瓶)
S P 11	1・2 a	横円形	1.35	0.62	0.18	
S P 12	2 a	"	1.36	0.64	0.13	土師器
S P 13	"	"	0.96	0.77	0.14	土師器、須恵器(杯) S C 代
S P 14	"	"	0.96	0.71	0.16	
S P 15	"	不整形	0.50	0.46	0.16	土師器、須恵器
S P 16	"	円形	0.62	0.50	0.22	土師器、須恵器(高杯・杯) 飛鳥
S P 17	"	横円形	1.16	0.72	0.08	
S P 18	"	"	0.48	0.40	0.16	土師器、須恵器
S P 19	2・3 a	"	1.40	0.86	0.34	
S P 20	2 a b	円形	0.52	0.50	0.29	土師器、須恵器
S P 21	"	"	0.62	0.52	0.24	
S P 22	2 b	横円形	0.62	0.42	0.41	
S P 23	"	円形	0.58	0.58	0.14	土師器
S P 24	"	"	0.54	0.48	0.16	土師器
S P 25	"	不整形	0.84	0.66	0.30	土師器、須恵器
S P 26	"	横円形	0.76	0.64	0.18	
S P 27	"	"	1.20	0.72	0.20	
S P 28	"	円形	0.45	0.40	0.19	
S P 29	"	横円形	0.52	0.35	0.18	
S P 30	"	円形	0.50	0.40	0.16	
S P 31	"	"	0.82	0.72	0.18	土師器
S P 32	"	不整形	1.16	0.72	0.20	土師器、須恵器 54
S P 33	"	円形	0.67	0.64	0.26	土師器、須恵器 S B 1
S P 34	"	横円形	0.42	0.34	0.14	土師器
S P 35	"	"	0.54	0.44	0.24	土師器 S B 1
S P 36	2 b c	円形	0.67	0.30	0.20	
S P 37	2 b	"	0.90	0.88	0.18	土師器
S P 38	"	横円形	0.75	0.68	0.23	土師器 S B 1
S P 39	"	円形	0.96	0.86	0.27	土師器(高杯)、須恵器 奈良
S P 40	"	"	0.40	0.33	0.13	
S P 41	"	横円形	0.56	0.42	0.19	土師器、須恵器(杯身) 6 c
S P 42	"	"	1.10	0.68	0.15	
S P 43	"	"	1.70	1.00	0.06	
S P 44	"	"	1.10	0.92	0.21	土師器、須恵器
S P 45	"	"	0.82	0.60	0.48	土師器(鉢) S B 1
S P 46	"	円形	0.48	0.40	0.20	
S P 47	"	"	0.39	0.31	0.13	
S P 48	"	"	0.34	0.28	0.14	
S P 49	"	横円形	0.73	0.53	0.17	土師器
S P 50	"	円形	0.66	0.63	0.12	土師器
S P 51	"	不整形	0.90	0.70	0.19	土師器、須恵器 S B 1
S P 52	"	横円形	0.49	0.34	0.13	土師器
S P 53	"	円形	0.43	0.37	0.16	土師器
S P 54	"	横円形	0.47	0.36	0.05	
S P 55	"	円形	0.56	0.35	0.19	
S P 56	"	"	0.45	0.40	0.17	
S P 57	"	"	0.34	0.18	0.22	

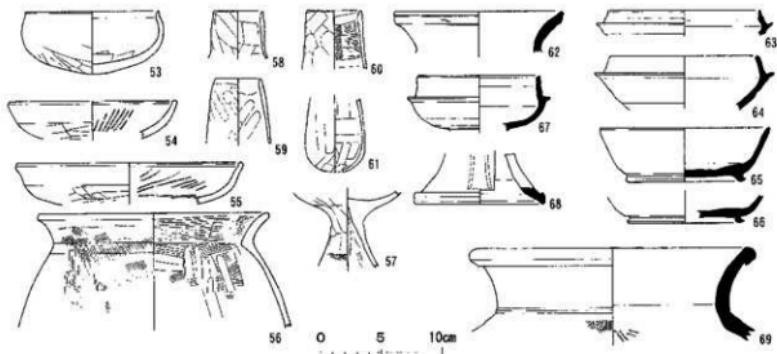
遺構番号	地区	上面形状	法量			出土遺物・備考
			長径	短径	深さ	
SP58	2 b	楕円形	1.11	0.83	0.23	土師器(高杯・有孔鉢) SB 1
SP59	"	"	1.20	0.66	0.06	
SP60	"	"	1.13	1.03	0.21	土師器 SB 1
SP61	"	円形	0.48	0.42	0.18	土師器
SP62	"	楕円形	1.27	0.80	0.24	土師器、須恵器 6 C代
SP63	"	円形	0.50	0.50	0.14	土師器
SP64	"	楕円形	0.58	0.30	0.16	土師器
SP65	"	円形	0.44	0.40	0.15	
SP66	"	"	0.40	0.36	0.15	土師器(蓋)
SP67	"	"	0.28	0.22	0.13	
SP68	2・3 b	楕円形	0.46	0.36	0.17	土師器
SP69	"	不整形	1.64	1.18	0.42	
SP70	2 b	円形	0.36	0.26	0.14	
SP71	2 c	"	0.32	0.28	0.05	
SP72	"	"	0.45	0.43	0.17	土師器、須恵器
SP73	"	"	0.18	0.18	0.09	
SP74	"	"	0.48	0.42	0.11	
SP75	"	"	0.87	0.56	0.39	土師器
SP76	"	"	0.32	0.28	0.14	土師器、須恵器(高杯)
SP77	"	"	0.32	0.31	0.22	
SP78	"	"	0.35	0.34	0.16	
SP79	"	"	0.36	0.23	0.18	土師器
SP80	"	"	0.42	0.40	0.24	土師器
SP81	3 a	"	0.65	0.62	0.15	土師器、須恵器 5・6 C
SP82	"	楕円形	0.80	0.69	0.11	土師器
SP83	"	"	0.67	0.61	0.13	土師器、須恵器 5・6 C
SP84	"	円形	0.70	0.54	0.23	
SP85	3 b	楕円形	1.28	0.72	0.33	土師器(蓋)、須恵器(器台) SB 2
SP86	3 a	円形	0.89	0.77	0.17	土師器 SB 2
SP87	"	楕円形	0.99	0.72	0.22	須恵器(杯身) 6 C末~飛鳥
SP88	"	円形	0.80	0.74	0.20	須恵器 SB 3
SP89	"	楕円形	0.42	0.38	0.19	
SP90	"	円形	0.68	0.62	0.33	土師器 SB 2
SP91	"	"	0.40	0.36	0.20	土師器、須恵器
SP92	"	"	1.00	0.94	0.17	SB 2 62
SP93	"	楕円形	1.34	0.85	0.24	土師器・須恵器(杯身) 6 c末 SB 3
SP94	"	円形	0.40	0.40	0.19	土師器(蓋)、須恵器(杯身) 6 c末
SP95	3 b	楕円形	0.83	0.45	0.14	土師器、須恵器
SP96	"	円形	0.59	0.52	0.12	土師器、須恵器
SP97	2 b	"	0.34	0.30	0.08	土師器
SP98	3 b	"	0.62	0.51	0.17	土師器
SP99	"	楕円形	1.18	0.57	0.13	土師器
SP100	"	"	0.64	0.36	0.15	
SP101	"	"	0.64	0.44	0.19	土師器
SP102	"	円形	0.66	0.56	0.14	
SP103	"	楕円形	0.62	0.56	0.14	土師器
SP104	"	円形	0.31	0.30	0.15	
SP105	"	"	0.48	0.45	0.14	土師器 SB 2
SP106	"	"	0.36	0.35	0.16	土師器
SP107	"	"	0.47	0.43	0.13	
SP108	"	"	0.35	0.34	0.18	
SP109	"	楕円形	0.55	0.43	0.14	土師器、須恵器 飛鳥前
SP110	"	"	1.20	0.90	0.08	土師器、須恵器 SB 3
SP111	"	円形	0.38	0.38	0.14	土師器
SP112	"	楕円形	0.90	0.62	0.17	土師器
SP113	"	円形	0.60	0.48	0.20	土師器(杯)、須恵器 奈良 SB 3
SP114	"	"	0.46	0.42	0.13	
SP115	"	"	0.40	0.40	0.16	土師器、須恵器

遺構番号	地区	上面形状	法量			出土遺物・備考
			長径	短径	深さ	
SP116	3 b	円形	0.42	0.38	0.17	
SP117	"	"	0.36	0.34	0.13	土師器、須恵器(高杯)
SP118	"	横円形	0.92	0.86	0.29	土師器、須恵器
SP119	"	"	0.78	0.66	0.16	
SP120	"	"	0.68	0.66	0.18	土師器、須恵器 6 C代
SP121	"	円形	0.56	0.56	0.20	
SP122	"	横円形	1.00	0.77	0.15	土師器、須恵器 5 C SB2
SP123	"	"	1.07	0.80	0.16	土師器(高杯)、須恵器
SP124	"	円形	0.86	0.83	0.15	SB2 SB3
SP125	"	横円形	1.10	0.74	0.17	土師器、須恵器 SB3
SP126	"	"	0.48	0.34	0.31	
SP127	"	"	0.80	0.42	0.24	土師器、須恵器 SB4
SP128	"	"	0.58	0.58	0.15	
SP129	"	"	1.28	1.22	0.20	
SP130	"	円形	0.90	0.63	0.10	SB4
SP131	"	"	0.42	0.40	0.12	
SP132	"	横円形	0.58	0.38	0.09	土師器
SP133	3·4 b	円形	0.68	0.63	0.21	土師器(高杯) SB4
SP134	3 b	"	0.46	0.40	0.12	土師器 SB4
SP135	3 c	"	0.44	0.34	0.27	土師器
SP136	4 a	"	0.30	0.28	0.12	土師器
SP137	"	"	0.56	0.54	0.20	
SP138	"	"	0.40	0.39	0.12	
SP139	"	"	0.58	0.54	0.22	
SP140	3·4 b	横円形	0.64	0.52	0.18	
SP141	4 b	"	0.80	0.52	0.15	土師器 SB4
SP142	"	"	1.00	0.67	0.16	土師器、須恵器
SP143	"	円形	0.30	0.28	0.22	土師器、須恵器(杯身) 6 C末~飛
SP144	"	横円形	0.66	0.44	0.23	
SP145	"	"	0.75	0.52	0.39	
SP146	"	円形	0.40	0.37	0.18	
SP147	"	横円形	0.38	0.33	0.20	
SP148	"	円形	0.36	0.34	0.13	土師器
SP149	"	"	0.42	0.38	0.11	土師器
SP150	"	"	0.42	0.40	0.07	土師器
SP151	"	"	0.34	0.32	0.16	
SP152	"	不整形	1.60	0.98	0.18	土師器、須恵器、製塙土器 5 C代
SP153	"	円形	0.70	0.66	0.17	土師器
SP154	"	横円形	0.37	0.34	0.15	
SP155	"	"	0.38	0.35	0.13	
SP156	"	"	0.80	0.58	0.17	土師器、須恵器
SP157	"	"	1.00	0.91	0.18	土師器、須恵器 SB5
SP158	"	"	0.93	0.30	0.10	
SP159	"	不整形	1.10	0.60	0.26	土師器、須恵器
SP160	"	円形	0.62	0.60	0.16	
SP161	"	"	0.47	0.40	0.13	土師器、
SP162	"	横円形	0.68	0.55	0.19	土師器
SP163	"	円形	0.32	0.32	0.11	須恵器
SP164	"	"	0.33	0.30	0.11	土師器、須恵器 5·6 C代
SP165	"	"	0.39	0.38	0.18	土師器
SP166	"	横円形	0.38	0.31	0.15	土師器
SP167	"	円形	0.53	0.50	0.20	土師器 5·6 C代 56
SP168	"	"	0.40	0.38	0.13	土師器
SP169	"	横円形	0.66	0.58	0.17	土師器
SP170	"	円形	0.60	0.50	0.21	土師器
SP171	"	"	0.32	0.30	0.08	土師器
SP172	"	"	0.43	0.42	0.14	
SP173	"	横円形	0.71	0.40	0.12	

遺構番号	地区	上面形状	法量			出土遺物・備考
			長径	短径	深さ	
S P174	4 b	円形	0.64	0.48	0.18	
S P175	"	"	0.58	0.56	0.20	土師器(高杯)、須恵器
S P176	"	隅丸方形	0.92	0.88	0.11	土師器、須恵器 SB 5 63
S P177	"	楕円形	1.30	0.60	0.16	
S P178	"	不整形	0.56	0.44	0.16	
S P179	"	楕円形	1.00	0.70	0.27	土師器、須恵器 SB 5
S P180	"	"	0.80	0.54	0.21	土師器、須恵器 5C代 53
S P181	"	"	0.34	0.26	0.14	
S P182	"	"	0.34	0.21	0.09	土師器
S P183	"	"	0.50	0.36	0.17	
S P184	"	"	1.00	0.70	0.23	土師器、須恵器
S P185	"	円形	0.74	0.70	0.29	土師器(土塗)、須恵器(杯身) 6C末SB 5
S P186	"	楕円形	0.96	0.64	0.06	
S P187	"	円形	0.56	0.50	0.33	土師器、須恵器(高杯) 5C
S P188	"	楕円形	0.70	0.52	0.15	土師器
S P189	"	円形	0.35	0.35	0.23	
S P190	"	"	0.50	0.34	0.24	土師器 SB 5
S P191	"	"	0.30	0.27	0.25	土師器
S P192	"	楕円形	0.64	0.41	0.12	
S P193	"	円形	0.50	0.44	0.36	土師器 SB 5
S P194	"	"	0.40	0.27	0.25	
S P195	4 c	隅丸方形	0.92	0.62	0.08	土師器、須恵器
S P196	5 b	円形	0.34	0.31	0.04	
S P197	"	楕円形	0.67	0.46	0.37	
S P198	"	円形	0.44	0.44	0.25	土師器
S P199	5 a	"	0.50	0.41	0.18	土師器
S P200	5 b	"	0.46	0.45	0.19	土師器、須恵器 奈良
S P201	5 a b	楕円形	1.20	0.83	0.21	土師器、須恵器
S P202	5 b	不整形	1.00	0.85	0.25	土師器
S P203	"	楕円形	1.58	1.04	0.09	土師器、須恵器 奈良
S P204	"	円形	0.24	0.22	0.22	
S P205	"	"	0.85	0.81	0.07	土師器(高杯)、須恵器 6C
S P206	"	"	0.80	0.50	0.07	土師器
S P207	"	"	0.44	0.36	0.16	土師器
S P208	"	"	0.40	0.38	0.04	土師器
S P209	"	"	0.42	0.40	0.09	土師器、須恵器(高杯) 5C
S P210	"	不整形	1.50	1.00	0.27	土師器(高杯)、須恵器(杯身) 57・65
S P211	"	"	1.42	0.86	0.11	土師器、須恵器(蓋・杯) 奈良 66-69
S P212	"	円形	0.49	0.48	0.21	土師器
S P213	"	楕円形	0.52	0.47	0.16	
S P214	"	不整形	0.86	0.72	0.20	土師器(高杯)、須恵器 6C
S P215	5 c	不明	1.50	0.56	0.16	土師器、須恵器
S P216	"	円形	0.54	0.50	0.29	
S P217	"	"	0.20	0.20	0.07	
S P218	"	"	0.22	0.20	0.08	土師器(杯)、須恵器(杯) 奈良中 55
S P219	"	"	0.42	0.40	0.23	土師器
S P220	"	不明	0.58	0.22	0.20	土師器
S P221	"	円形	0.38	0.30	0.11	
S P222	"	不明	0.76	0.34	0.13	土師器、須恵器(杯蓋)
S P223	5・6 b	円形	0.42	0.40	0.16	土師器
S P224	6 a	不明	0.40	0.12	0.14	
S P225	"	円形	0.52	0.47	0.16	土師器、須恵器(杯) 5C
S P226	"	"	0.36	0.34	0.10	
S P227	6 a b	円形	0.60	0.58	0.12	須恵器
S P228	6 a	不明	0.45	0.16	0.14	
S P229	"	"	0.45	0.23	0.14	
S P230	"	不整形	1.11	0.80	0.24	土師器、須恵器
S P231	"	不明	0.49	0.32	0.09	土師器(杯)、須恵器 奈良中

遺構番号	地区	上面形状	法量			出土遺物・備考
			長径	短径	深さ	
S P 232	6 a	不整形	1.07	0.81	0.25	土師器(高杯)、須恵器(杯身) SB 6 67
S P 233	"	楕円形	0.43	0.29	0.10	
S P 234	"	円形	0.38	0.35	0.17	土師器、須恵器(杯身) 飛鳥前
S P 235	"	"	0.52	0.50	0.32	土師器 SB 6
S P 236	"	"	0.80	0.70	0.22	
S P 237	"	隅丸方形	1.00	0.70	0.16	土師器
S P 238	"	楕円形	0.98	0.58	0.15	土師器 SB 6
S P 239	"	"	0.46	0.45	0.14	土師器
S P 240	"	円形	0.32	0.28	0.12	
S P 241	"	楕円形	0.98	0.90	0.06	土師器
S P 242	"	円形	0.74	0.70	0.16	土師器 SB 6
S P 243	6 b	楕円形	0.74	0.46	0.15	土師器、須恵器 5・6 C
S P 244	"	円形	0.32	0.32	0.13	
S P 245	"	"	0.70	0.62	0.24	須恵器(杯身) 6 C 中 64・68
S P 246	"	楕円形	0.32	0.28	0.17	土師器、須恵器
S P 247	"	円形	0.57	0.52	0.17	土師器、須恵器(高杯)、製塙 5 C
S P 248	"	楕円形	0.70	0.44	0.07	土師器
S P 249	"	円形	0.52	0.52	0.12	土師器
S P 250	"	"	0.32	0.28	0.10	
S P 251	"	"	0.38	0.36	0.10	土師器 奈良
S P 252	6 a b	"	0.64	0.56	0.20	
S P 253	6 b	"	0.42	0.41	0.13	
S P 254	"	"	0.26	0.26	0.11	
S P 255	"	"	0.30	0.25	0.08	
S P 256	"	"	0.24	0.22	0.12	土師器(高杯) 飛鳥
S P 257	"	"	0.42	0.40	0.13	
S P 258	"	"	0.56	0.56	0.14	
S P 259	"	楕円形	1.00	0.60	0.18	土師器、須恵器
S P 260	"	円形	0.24	0.22	0.10	土師器
S P 261	"	楕円形	0.56	0.48	0.13	土師器
S P 262	"	"	0.52	0.36	0.15	土師器、須恵器 6 C 代
S P 263	"	"	0.44	0.39	0.13	
S P 264	"	"	0.62	0.52	0.20	
S P 265	"	円形	0.46	0.42	0.18	土師器
S P 266	"	楕円形	0.54	0.40	0.15	土師器
S P 267	"	円形	0.40	0.38	0.13	土師器、須恵器
S P 268	"	楕円形	1.16	1.00	0.16	土師器
S P 269	"	不整形	1.10	1.04	0.26	土師器、須恵器(杯蓋) 5 C 後 SB 7
S P 270	"	円形	0.40	0.40	0.15	
S P 271	7 a	"	0.90	0.80	0.18	
S P 272	"	"	0.44	0.41	0.05	土師器
S P 273	6 a	"	0.46	0.42	0.11	SB 7
S P 274	7 a	"	0.32	0.32	0.08	
S P 275	"	"	0.50	0.44	0.18	土師器 SB 7 SB 8
S P 276	6・7 a	"	0.42	0.38	0.12	SB 8
S P 277	7 a	"	0.40	0.36	0.23	土師器 SB 8
S P 278	"	"	0.20	0.16	0.08	
S P 279	6	"	0.46	0.40	0.18	SB 8
S P 280	7 a	"	0.52	0.50	0.22	土師器 SB 8
S P 281	"	楕円形	0.44	0.28	0.24	SB 8
S P 282	7 a b	円形	0.46	0.44	0.21	SB 8
S P 283	7 a	"	0.50	0.46	0.20	SB 8
S P 284	"	"	0.80	0.46	0.13	SB 7 SB 8
S P 285	6・7 b	"	0.55	0.44	0.40	土師器、製塙土器 SB 8
S P 286	7 b	"	0.46	0.42	0.20	土師器 SB 8
S P 287	"	"	0.48	0.40	0.18	土師器 SB 8
S P 288	"	"	0.30	0.30	0.02	
S P 289	"	楕円形	0.70	0.57	0.18	土師器 SB 7

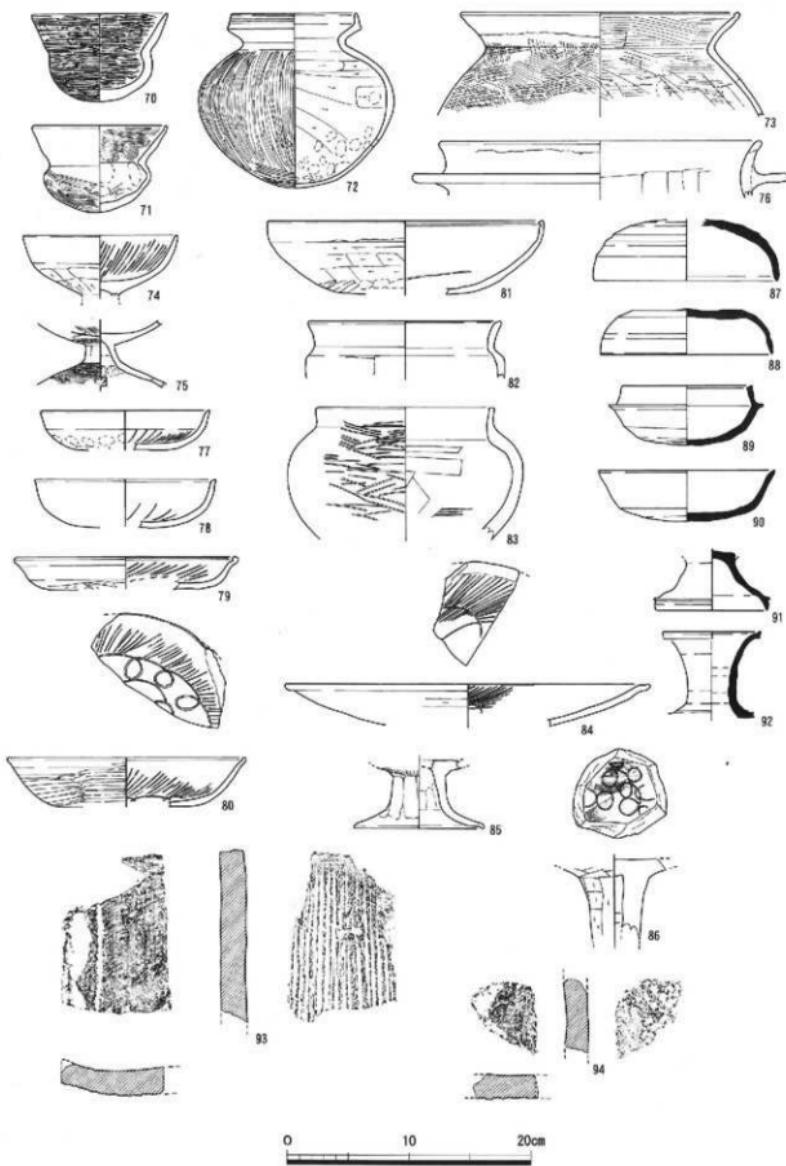
遺構番号	地区	上面形状	法量			出土遺物・備考
			長径	短径	深さ	
S P290	6 a	楕円形	0.63	0.46	0.19	土師器 S B 7
S P291	6 b	不整形	0.50	0.30	0.15	
S P292	"	楕円形	2.10	0.46	0.08	土筋器、須恵器
S P293	"	円形	0.38	0.35	0.08	土筋器
S P294	"	"	0.38	0.32	0.11	土師器
S P295	"	楕円形	0.42	0.34	0.11	
S P296	7 b	円形	0.50	0.46	0.18	
S P297	"	楕円形	0.47	0.31	0.18	土師器
S P298	"	円形	0.84	0.65	0.19	土師器
S P299	6 b	楕円形	0.44	0.20	0.11	土師器 S B 7
S P300	7 b	円形	0.80	0.70	0.15	土師器、須恵器(杯蓋)、製塙土器 5
S P301	"	楕円形	0.90	0.58	0.14	製塙土器 58~61
S P302	"	"	0.54	0.48	0.20	土師器
S P303	"	円形	0.72	0.62	0.21	土師器、製塙土器 5 C
S P304	"	隅丸方形	1.00	0.84	0.16	土師器、製塙土器 5 C



第27図 小穴・柱穴出土遺物実測図〔S P32(54)、S P92(62)、S P167(56)、S P176(63)、S P180(53)、S P210(57・65)、S P211(66・69)、S P218(55)、S P232(67)、S P245(64・68)、S P301(58~61)〕

2) 遺構に伴わない遺物

第3層および第4層を中心に古墳時代前期前半(布留式占相)から奈良時代に比定される遺物が出土している。ただ遺構構築面である第4層出土の遺物については、河川に起因する堆積層であるため、二次堆積遺物で時期的には古墳時代前期前半(布留式古相)以前のものに限定される。21点を図化した。70~75が古式土師器、76~86が土師器、87~92が須恵器、93・94が平瓦で、第4層川土遺物が70・72・74・75でそれ以外は第3層出土遺物である。70・71は小形丸底壺である。70は口径が体部最大径を大きく凌駕するもので小形壺B₁に分類される。口縁部の一部を欠く以外は完存している。器面調整は横位のヘラミガキが多く用されている。口径11.0cm、器高7.2cmを測る。布留Ⅲ期。71は大きく開く口縁部を有する小形壺B₄で約1/2が残存している。器面調整は口縁部外側がナデ、内面ハケ。体部外側はヘラケズリの後、横位のヘラミガキを施す。やや粗製品で色調は淡黄色を呈する。布留Ⅳ期。72は複合口縁を有する吉備系の小形壺(複合口縁壺F)である。口縁部の大半を欠く以外は完存している。復原口径10.0cm、器高14.2cm、体部最大径16.0cm



第28図 第3層(71・73・76~94)、第4層(70・72・74・75)出土遺物実測図

を測る。口縁端面に4条の擬凹線を施す。体部外面は縦方向のヘラミガキが体部上位から底部にかけて施されている。内面は横位のヘラケズリと底部に指頭圧痕が認められる。高橋謙氏編牛のX-e期(布留式古相併行)に比定される。73は大きく肥厚する口縁端部を持つ布留式甕の細片である。復原口径22.4cmを測る。74・75は楕円形高杯(高杯C)である。74は杯部が完存しており口径12.4cm、杯部高5.0cmを測る。75は杯部底部から脚部中位が残存している。74・75共に布留I期。76は上師器羽釜片である。鋸は短く水平方向に貼り付く。復原口径26.0cm。奈良時代中期。77・78は杯Cである。共に約1/3が残存しており、復原口径は77が13.6cm、78が14.6cmである。共に飛鳥時代後期。79・80は土師器杯A。79が奈良時代中期、80が飛鳥時代後期。81は上師器鉢で約1/6が残存している。復原口径22.4cm、器高6.0cmを測る。奈良時代中期。82は上師器壺の細片である。復原口径15.6cmを測る。奈良時代後期。83は球形の体部から口縁部が直上に短く伸びる上師器壺。奈良時代前期から中期。84~86は土師器高杯Aの細片。84は杯部片。復原口径30.0cmを測る。杯部内面に螺旋と放射状暗文が認められる。85は低脚の脚部で約1/2が残存している。奈良時代中期。86は長脚の脚部片で、外側の面取りは8面である。奈良時代前期。87は須恵器杯蓋で約1/3が残存。復原口径15.0cm、器高5.0cmを測る。内面全体に煤の付着が認められる。田辺編年のTK10型式(6世紀中葉)。88は須恵器杯蓋で約1/2が残存している。復原口径14.1cm、器高3.7cmを測る。田辺編年のTK43型式(6世紀後半)。89は須恵器杯身である。ほぼ完形で口径10.6cm、器高4.9cm、受部径12.7cm、受部高1.6cmを測る。田辺編年のTK23型式(5世紀後半)。90は須恵器杯A。約1/3残存で復原口径14.4cm、器高4.2cmを測る。奈良時代中期。91は無蓋高杯の脚部。裾部径9.1cmを測る。古墳時代後期後半。92は須恵器壺の口頭部である。口頭部は1/2が残存しており、口径8.0cm、頸部高7.0cmを測る。奈良時代後期。93・94は平瓦片である。93は凹面に細かい布目、凸面に格子叩きが施されている。遺物の出土地点は立会調査の4層出土物の70・72・74・75が6C地区。発掘調査の3層出土物のうち4a~c地区より北側が71・73・76・81~83、85・88・91、南側が77~80、84・86・87・89・90・92~94である。

3) 立会調査

立会調査では、八尾中学校グランド内に蜘蛛の巣状に計画された透水管敷設部分の内、遺構構築面に達する発掘調査部分周辺の透水管敷設部分を対象とした調査を実施した。透水管敷設工事に並行して実施した立会調査で、幅0.3m、深さ1.0m、延べ約392mの掘削部分において遺物包蔵層の深度確認および遺物収集を行った。(調査位置は第6図参照)

[検出遺構および出土遺物の形式・編年・時期概念等で参考とした文献について]

- ・田辺昭一 1966『陶邑古窯址群I』平安学園考古学クラブ
- ・奈良国立文化財研究所 1978『飛鳥・藤原宮発掘調査報告II』奈良国立文化財研究所学報第32冊
- ・古代の上器研究会編 1992『古代の上器I 都城の土器集成』
- ・古代の上器研究会編 1993『古代の上器II 都城の土器集成』
- ・佐藤 隆 1992『第2節 平安時代における長原遺跡の動向 ii)長原遺跡における平安時代の上器編年』『大阪市平野区 長原遺跡発掘調査報告V 市営長吉長原住宅建設に伴う発掘調査報告書 後編』(財)大阪市文化財協会

- ・田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- ・宇野隆大 1982『井戸考』『史林 六五巻五号』
- ・高橋 謙 1988『弥生時代終末期の土器編年』岡山県立博物館
- ・原田昌則 1993『第5章まとめ 3) 中河内地域における川内式から布留式土器の編年試案』『II 久安寺遺跡(第1次調査)』(財)八尾市文化財調査研究会報告37

第4章 まとめ

第26次・第27次調査を含めて、古墳時代前期から鎌倉時代に至る遺構・遺物を検出した。特に、第27次調査では、第4層上面で古墳時代中期初頭から鎌倉時代後期の遺構を検出し、長期間に亘り居住域として利用されていたことが確認された。遺構構築面を構成する第4層は細粒砂・中礫が優勢な自然河川に関わる堆積層で、松田順一郎氏が提唱された萱振遺跡南東部を縱断して北方の河内湖に注ぐ弥生時代後期から古墳時代前期後半の主要河川であった小阪合分流路に関連した堆積層と推定される。この層の広がりは、第27次調査の全城と第26次調査の5区で検出されており、八尾中学校校地内の中央部を南東から北西方向に流下した小阪合分流路の西岸が想定される。一方、八尾中学校校地内での小阪合分流路西岸一帯の地層はシルトが優勢な層相で、この部分で検出した古墳時代後期(6世紀)の遺構構築面の標高が河川跡部分に比して約0.4~0.6m低いことからこの部分では、小阪合分流路が自然堤防状を形成し、それより西側が後背湿地の環境を呈していたことが推定される。この小阪合分流路の東岸については、東接する位置で昭和58年度に府教委により実施された府営住宅に伴う発掘調査のB・Cトレーナー西部で検出されたNR401が該当するもので、これらを総合すれば、130m前後の川幅を持つ自然河川であったことが推定される。調査地付近における小阪合分流路流域の古墳時代初頭から前期の集落形成時期は古墳時代前期前半(布留Ⅰ期)以降で、その後小阪合分流路内の堆積作用に伴う川幅減少の進行のなかで前期後半(布留Ⅳ期)段階には、河川跡部分を含めた周辺で居住域規模を拡大している。以下、検出した遺構を時期毎に概観する。

古墳時代中期 この時期の遺構は調査区全域で認められるが、特に集中するのは5a~c地区以南である。SB6・SB8およびSK10・SK11と居住域を南北に区画するSD9がある。時期的には中期(5世紀)の全般におよんでおり、長期間に亘って安定した居住域構成が想定される。当該期の集落は、萱振遺跡南部では確認されておらず、調査地点から南約500mの東郷遺跡内東部の第1次・第2次・第24次調査付近での集落域が想定される。

古墳時代後期 調査地のほぼ全城に亘って散発的な分布を認めるが、SB2およびSK7を検出した3・4a・b地区が中心と考えられる。時期的には後期前半および後期後半がある。後期前半の遺構は本例のみで、後期後半では調査地点から北東約200m地点の第3次調査から方墳で木棺直葬の埋葬施設を持つ萱振2号や調査地点から南約170m地点の第4次調査でも上塙墓の可能性がある遺構の検出が検出されている。特に古墳時代後期半において平野部に築造された萱振2号墳の存在は他に類例が無く、同時期に生駒山地西麓部に展開した高安古墳群との古墳築造の在

り方を考える上で貴重である。

飛鳥時代 調査地全域に亘って散発的な分布が認められるが、調査区北部のSB3・SB4およびSK6・SK8付近が中心で時期的には飛鳥時代前期から中期のものがある。周辺では、東接する府教委による昭和58年度調査Cトレンチの包含層から飛鳥時代中期の遺物が出土しており、調査地から東部に居住域の広がりが想定される。

奈良時代 調査区南部の5a～c地区より南部で検出した。当該期の遺構はSD6・SD7、SK15がある。SD6・SD7は東西方向に並行して伸びるもので、共に奈良時代前期を中心とする遺物が出土している。溝間部分を道路と推定すれば、両面側溝を持つ道路状遺構の可能性がある。当該時期の遺構は周辺においても本例以外は無く実態は不明である。

平安時代前期 調査区全域で検出した。SB1、SE1、SK9、SD4が主な検出遺構である。9世紀前半から中葉を中心としており、同時期の遺構は調査地の南に近接した第4次・第8次調査で掘立柱建物、井戸等の居住域を構成する遺構群が検出されており、これらを含めて東西約100m、南北約200mに当該期の居住域が想定される。

鎌倉時代後半 当該期の遺構は調査区南端部分で検出した東西方向に伸びるSD10がある。位置的には、若江郡(北部条里)の六条と七条の里境にあたるため、里境を区画する溝であった可能性がある。既存調査においても周辺部で当該期居住域を構成する遺構の検出は皆無であり、水田・畠地等の生産域としての土地利用が想定される。

註記

註1 松田順一郎 2001「河内平野沖積平野南部における元新世後期の旧大和川分流発達と人間活動」『環境と人間社会』埋蔵文化財研究所

註2 阪田育功 1984『菅原遺跡発掘調査概要・Ⅱ一八尾市緑ヶ丘2丁目所在一』大阪府教育委員会

参考文献

- ・大野 善 1983『菅原遺跡発掘調査概要・Ⅰ一八尾市緑ヶ丘2丁目所在一』大阪府教育委員会
- ・西村公助 1990『市立八尾中学校体育館等建設工事に伴う調査(第2次調査)』『菅原遺跡発掘調査概要報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告20 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・西村公助 1990『府営八尾寮第3期中層住宅新営工事に伴う調査(第3次調査)』『菅原遺跡発掘調査概要報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告20 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・西村公助 1993『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 IV菅原遺跡(第4次調査)』(財)八尾市文化財調査研究会報告37 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・西村公助 1993『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 IV菅原遺跡(第8次調査)』(財)八尾市文化財調査研究会報告37 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・柳橋利光 1982『八尾の条里制』八尾市紀要 第六号 八尾市史編さん室
- ・高萩千秋 1981『東郷遺跡発掘調査概要』『八尾南遺跡・東郷遺跡発掘調査概要』
- ・米田敏幸 1983『第8章 東郷遺跡発掘調査概要報告』『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度』八尾市教育委員会
- ・高萩千秋 1991『第3章 第24次調査』『東郷遺跡-第23次・第24次発掘調査報告一』(財)八尾市文化財調査研究会報告29 (財)八尾市文化財調査研究会

図 版



調査地北部全景(南から)



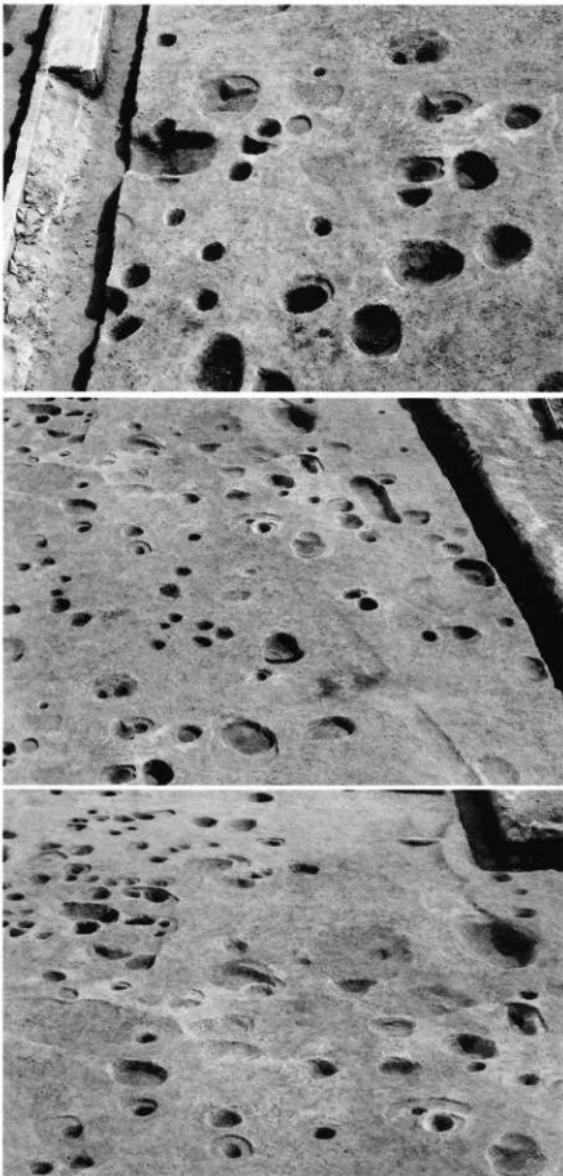
同上(北から)



調査地南部全景(南から)



同上(北から)



SB 1 検出状況 (北から)

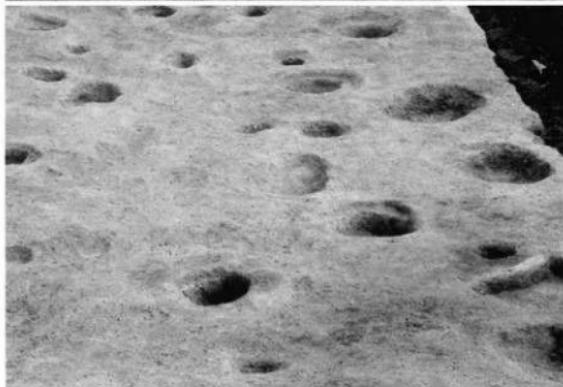
SB 2・3 検出状況 (北から)

SB 4 検出状況 (北から)

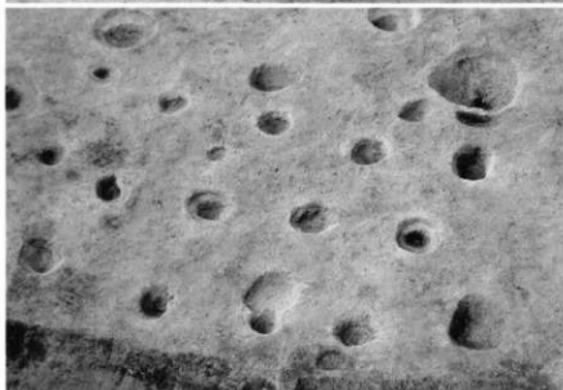
図版四



SB 5 検出状況(南から)



SB 6 検出状況(北から)



SB 7・8 検出状況(南から)



SK 1 検出状況(南から)



SK 7 検出状況(北から)



SK 9 検出状況(北東から)



SK 11検出状況(南から)



SD 6・7 検出状況(西から)



SD 9 検出状況(東から)



3



13



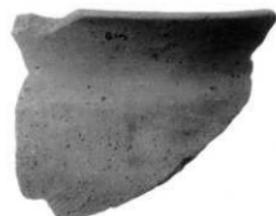
4



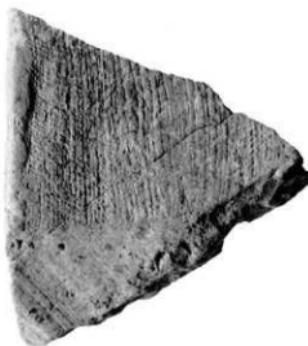
19



8



21



14

SE 1 (3・4・8・13・14)、SK 7 (19)、SK 9 (21)出土遺物

図版八



22



44



23



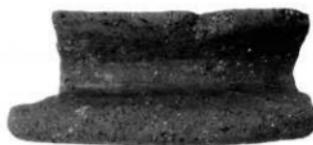
45



24



47



32



48

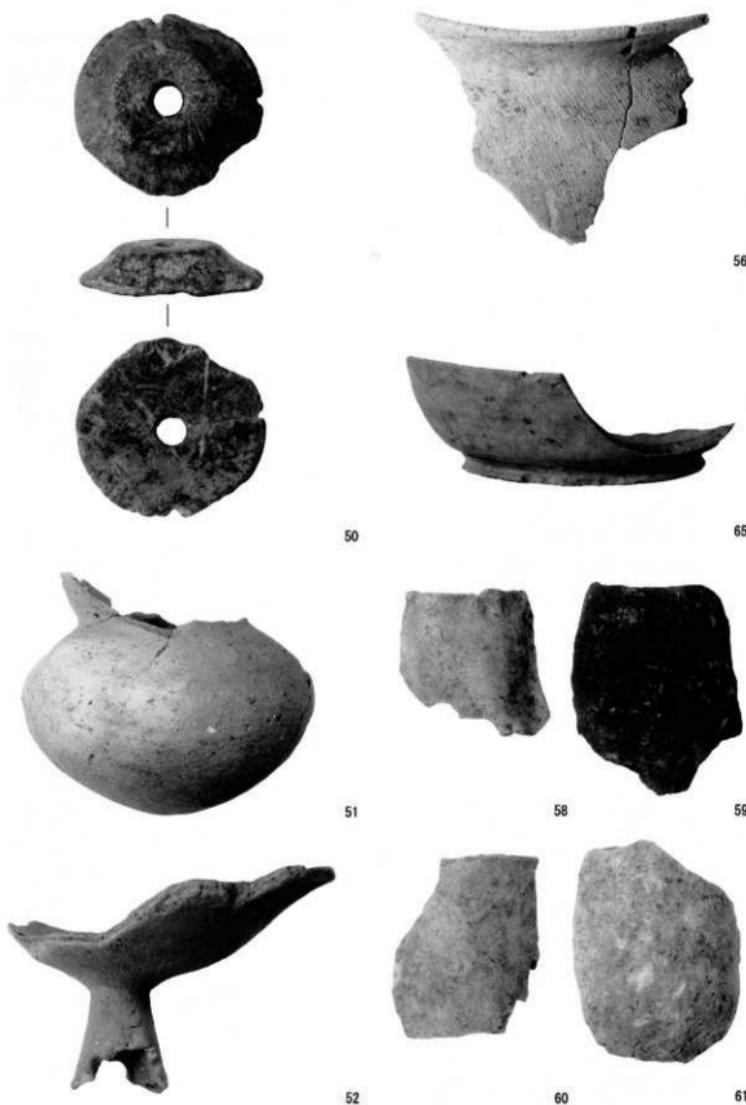


35



49

S K 9 (22)、S K10(23)、S K11(24)、S D 4 (32)、S D 6 (35)、S D 7 (44~49) 出土遺物



S D 7 (50)、S D 9 (51・52)、S P 167(56)、S P 210(65)、S P 301(58~61)出土遺物



67



73



69



71



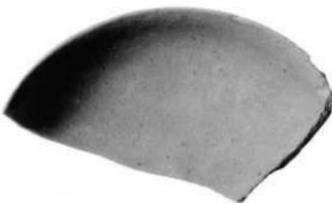
70



74



72



76



77

S P 232(67)、S P 211(69)、第3層(70・72・74)、第4層(73・76・77)出土遺物



第4層(80・86・89・90~94)出土遺物

報告書抄録

あたりがな	かやふりいせき
書名	古墳遺跡
副書名	第26次・第27次調査
卷次	
シリーズ名	財團法人 八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	133
編集者名	高萩千秋・原田昌則
編集機関	財團法人 八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町四丁目58-2 TEL・FAX 072-994-4700
発行年月日	西暦2011年3月31日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
古墳遺跡 (第26次調査)	大阪府八尾市緑ヶ丘一丁目	27212	65	343758	1353638	20100522	36m ²	流域貯留浸透施設築造工事 (市立八尾中学校)に伴う埋蔵文化財試掘調査業務
古墳遺跡 (第27次調査)	大阪府八尾市緑ヶ丘一丁目	27212	65	343757	1353640	20100716 ～ 20100814	960m ²	流域貯留浸透施設築造工事 (市立八尾中学校)に伴う埋蔵文化財発掘調査業務

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・地層	主な遺物	特記事項
古墳遺跡 (第26次調査)	集落	古墳時代前期	包含層	古式土師器	
		古墳時代後期	土坑・溝込み	土師器、須恵器、製塩土器	
古墳遺跡 (第27次調査)	集落	古墳時代前期	土坑	古式土師器(小型丸底壺)	
		古墳時代中期	獨立柱建物・土坑・溝・小穴	土師器(壺・鉢)、須恵器(杯盤)、製塩土器	
		古墳時代後期・飛鳥時代	獨立柱建物・土坑・溝・小穴	土師器、須恵器、滑石・製鉄鋸車	
		奈良時代	土坑・溝	土師器、須恵器	
		平安時代前期	溝	土師器、瓦	
		鎌倉時代	溝	瓦	
					古墳時代中期～後期の獨立柱建物4棟以上の居住関連遺構を検出。

財団法人八尾市文化財調査研究会報告133

萱振遺跡

第26次・第27次調査

発 行

平成23年3月

編 集

財団法人八尾市文化財調査研究会

〒581-0821

大阪府八尾市幸町四丁目58番地の2

TEL・FAX (0729) 94-4700

印 刷

(株)熨斗秀興堂

表紙 レザック66 <260kg>

本文 ニューエイジ < 70kg >

図版 ニューエイジ < 70kg >

